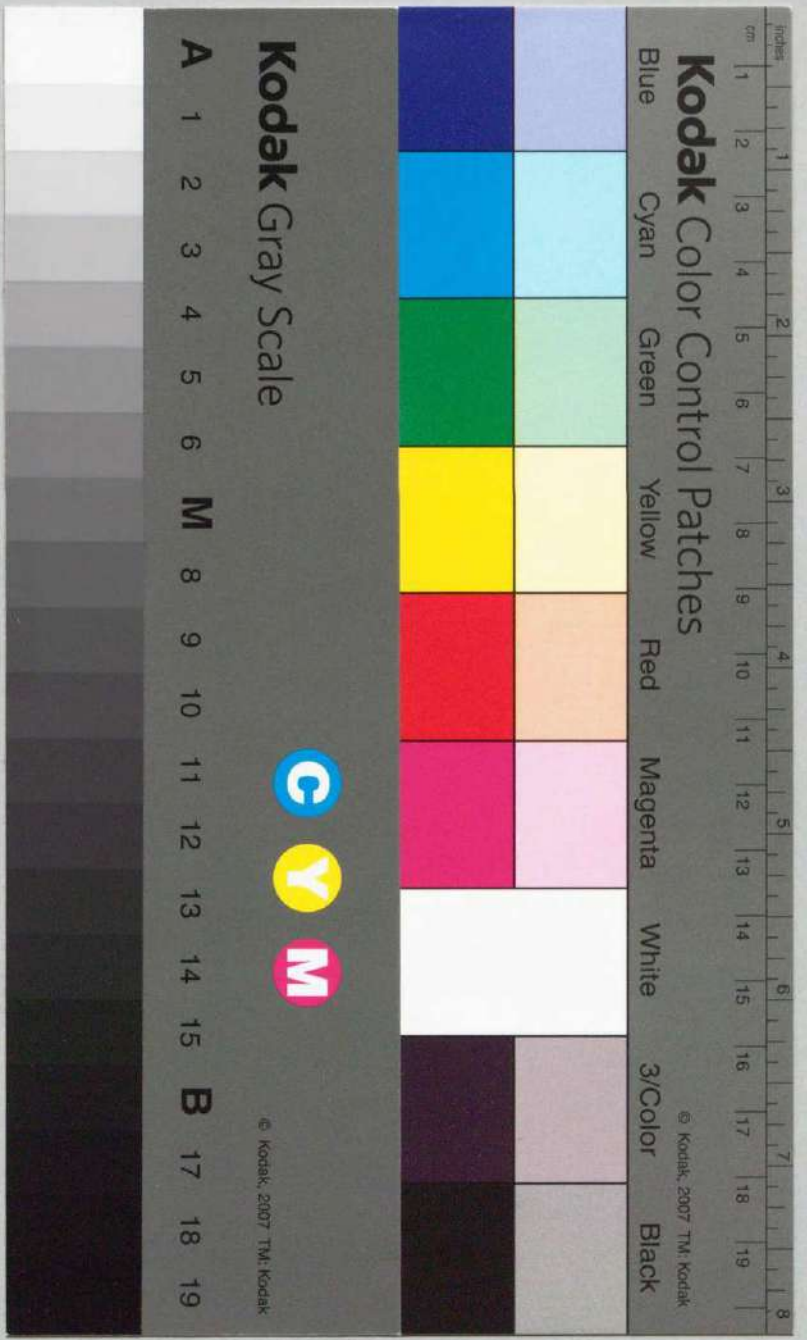




と紙質を調べることもお話ししていただきました。



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

磨齒ニオイラ



西村アヤ作並畫

◆四六判、アールト刷の挿畫入、藝術的美本◆三三版

繪入。童話。ピノチヨ

山本 鼎先生序、沖野岩三郎先生跋

定價

金壹圓卅五錢

(送料六錢)

▼「ピノチヨ」は伊太利の有名な童話で、外國では「イソップ物語」や「アラビヤン、ナイト」の様に廣く讀まれてゐます。アヤ子さんは毎晩食堂の出窓の所で、此面白い話をお父さんから聞いたのです。それから一年程たつてアヤ子さんが十二歳になつた時記憶を辿り書いたのが此の「ピノチヨ」です。

▼「ピノチヨ」といふのは、お話の中に出て来るあやつり人形の名ですが、こいつ中々面白いやつで、親不孝をしたり、人にだまされたり、魚に食べられて了つたりしますが、しまひにはすつかり改心して大變親孝行者になります。

▼アヤ子さんの「ピノチヨ」は天下第一品です。實に面白くて、爲になる本であるばかりか、また兒童の綴方には、もつてこいの参考書です。

▼その文章といひ、自由畫といひ、教育家や、文士、美術家などの是非一度は見て置くべき本です。

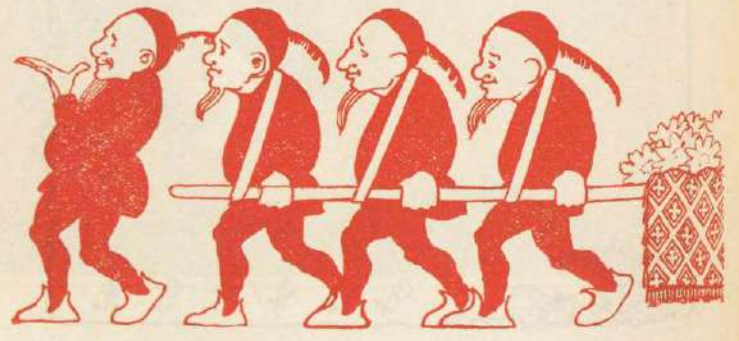
□ □ 東京 荻原 町 麩 京 東 □ □
二七五〇三 社ノツノンキ 町 麩 京 東 □ □

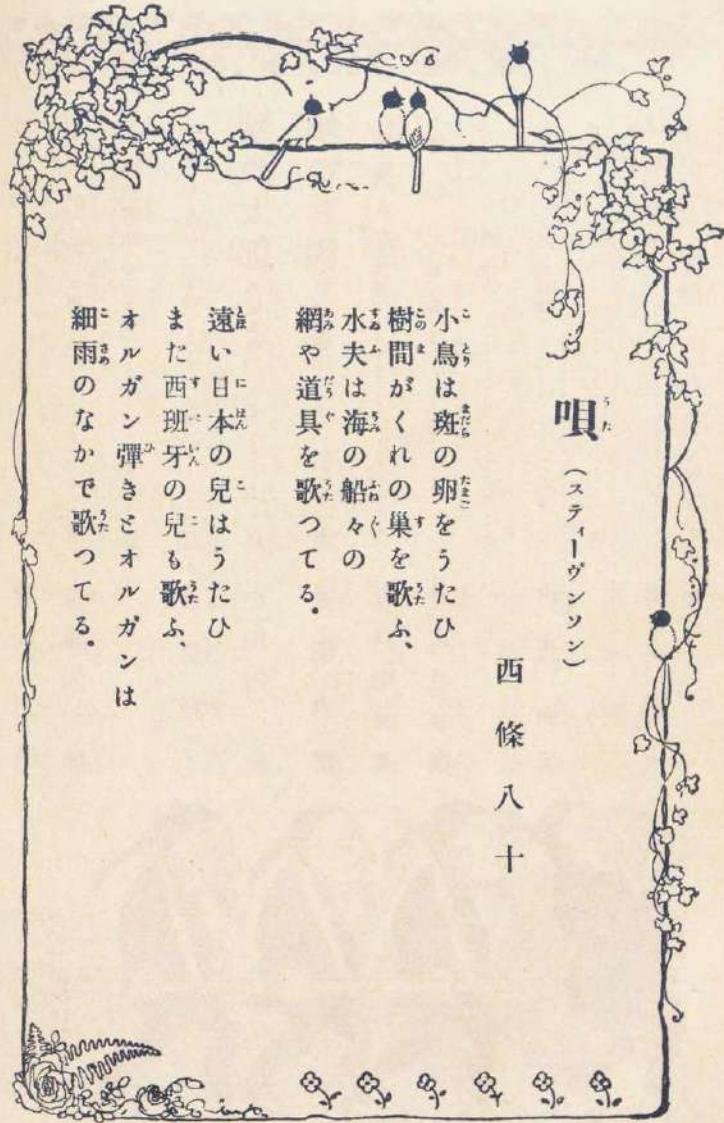
金の船 九月號 (第二卷第九號)

兎さん(表紙、石版刷)……………岡本歸一
 唄(童話)……………西條八十
 十五夜お月(曲講)……………本居長世
 十五夜お月(童話)……………野口雨情
 夢 殿(童話)……………楠山正雄
 山六爺さん(童話)……………沖野岩三郎
 狐のしかへし(繪ばなし)……………三
 リ、アンのお人形(童話)……………三島章道
 かみなり(童話)……………若山喜志子
 支那伊蘇普物語……………楠山正雄
 一ノ谷の合戦(歴史童話)……………窪田空穂



俄大名(童話)……………横山壽篤
 羊の偽物(童話)……………齋藤佐次郎
 凸坊新畫帖(ボンチ畫)……………美
 ぶうらんこ(童話)……………茅野雅子
 琴の太郎(長篇童話)……………小山内薫
 蟻のお國(長篇童話)……………長田秀雄
 罌粟人形(童話)……………野口雨情選
 柿の木(幼年詩)……………若山牧水選
 泥棒(綴方)……………金
 花瓶(自由畫)……………山本鼎選
 通? 信……………金
 日繪、挿畫……………岡本歸一





唄

(スライヴァンソン)

西條八十

小鳥は斑の卵をうたひ
樹間がくれの巢を歌ふ
水夫は海の船々の
網や道具を歌つてる。

遠い日本の兒はうたひ
また西班牙の兒も歌ふ
オルガン弾きとオルガンは
細雨のなかで歌つてる。

十五夜お月

作曲 本居長世
作歌 野口雨情

6 7 1 3 | 7 6 6 4 - | 6 7 1 6 | 7 - 0 |
十一夜 おつきさん ごきげん さん

rit.
1 3 1 1 | 7 6 4 3 | 2 3 4 2 | 3 - 0 |
ばーやは おいこまごりました

6 7 1 3 | 7 6 6 4 - | 6 7 1 6 | 7 - 0 |
十一夜 おつきさん いもうこは



船の金

号月九

rit.

1 3 1 1 | 7 6 4 3 | 2 3 4 2 | 3 - 0 |
 る な か へ | も ら れ て | ゆ き ま し | た 0 |

6 7 1 3 | 7 6 4 | 6 7 1 6 | 7 - 0 |
 十 一 夜 お つ き さ ん か か さ ん に

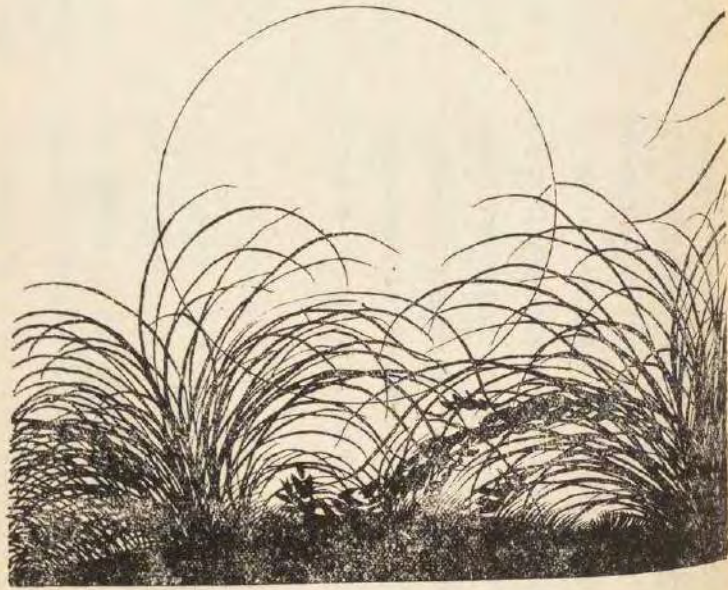
rit.

1 3 1 1 | 7 6 4 3 | 6 7 1 7 | 6 - 0 ||
 も い ち じ わ た し は あ い た い な

rit.

8va.

婆ばあやは お暇やすみ
 とりました
 十五夜いそよひ お月つきさん
 妹いもうとは
 田舎いなかへ貰もらられて
 ゆきました
 十五夜いそよひ お月つきさん
 母ははさんに
 も一度いちど わたしは
 逢あひたいな



十五夜いそよひ お月つきさん
 御機嫌ごきげんさん
 野口雨情のこうりゆう
 十五夜いそよひ お月つき





夢殿

楠山正雄

一

むかし、日本の國にはじめて佛さまの教が、外國から傳はつて來た時分のお話です。

第三十一代の用明天皇といふ天子さまのお后の穴太部の眞人の皇女といふ方が、或晩御覽になつたお夢に、體中からきら／＼した金色の光を放つて、何ともいへない貴い容子をした坊さんが現れて、お后に向ひ、

『わたしは人間の苦みを救つて、此の世の中を善くしてやりたいと思つて、はる／＼西の方からや

つて來た者です。しばらくの間あなたのお腹を借りたいと思ふ。』といひました。

お后はびつくりして、

『あなたはやうな貴いお方が、どうしてわたくしのむさくるしいお腹の中などへ、お入りになれませう。』と仰しやいますと、その坊さんは、

『いゝや、けつしてその氣づかひには及ばない。』と言ふが早いのか、踊り上がつてお后の思はず開けた口の中へぼんと跳び込んでしまつた、と思ふとお夢はさめました。

目がさめて後お后は、喉の中に何か固い、玉でもく／＼んでゐるやうな妙な氣持でしたが、やがて身持におなりになりました。

さて翌年の正月元日の朝、お后は御殿の中を歩きながら、お厩の戸口まで行らつしやいますと、にはかに御産氣がついて、安々と美しい男の御子

をお生みになりました。召使の女官たちは大さわぎをして皇子を抱いて御産屋へお連れすると、御殿の中は急に金色の光でばつと明るくなりました。そして皇子のお體からは、それは／＼ふしぎな香ばしい薫りがふんと立ちました。

お厩の戸の前でお生れになつたといふので、皇子のお名を厩戸の皇子と申上げました。皇太子にお立ちになつた後に聖德太子と申上げるのは此皇子のことです。

二

さて太子はお生れになつて四月めには、もうずん／＼口をおき／＼になりました。明る年の二月十五日は、お釋迦さまの亡くなつた御涅槃の日でしたが、二歳になつたばかりの太子は、可愛らしい兩掌を合せ、西の方の空に向つて、

『南無釋迦佛。』とお唱へになつたので、おつきの



太子の子を懐かしく抱きとらした太子

人たちはみんなびつくりしてしましました。

太子が六歳の時でした。はじめて朝鮮の國から佛さまの御經を澤山日本へ献上して來ました。すると太子は、或日天子さまの前へ出て、

「外國から御經がまゐつたさうでございます。わたくしに讀ませて頂きたうございます。」と申し上げました。天皇はまたくびつくりなさつて、

「どうしてお前に御經が分かるのだらう。」と仰しやいますと、太子は、

「わたしは昔支那の南岳といふ山に住んでゐて、長年佛の道を修行いたしました。こんど日本の國に生れて來ることになりましたから、昔の通りまたお經を讀んで見たいと思ひます。」と御答へになつたので、それでは太子はさういふ貴い人の生れかぶりであつたのかと初めてお悟りになつて、お禮と佛像を太子に下さいました。

太子が八歳の年でした。新羅の國から佛さまの姿を刻んだ佛像を献上いたしました。その使者たちの旅館に泊つてゐる容子を見ようと思つて、太子はわざと貧乏人の子供のやうなぼろ／＼な姿をして、町の子供たちの中に交つて行きました。すると新羅の使者の中に一人、日羅といふ貴い坊さんがをりましたが、汚ない童たちの中に太子のゐるのを見付けて、

「神の子がおいでになる。」といつて、太子に近づかうとしたので、太子はびつくりして逃げて行かうとなさいました。日羅はあわてゝ履もはかずに駆け出して追ひかけました。そして太子の前の地べたに跪いたまゝ、恭しく、敬禮救世觀世音菩薩妙教流通東方日本國」

と申しますと、日羅の體から光明がかつと射しました。そして太子の額からは白い光がきらりと射

しました。日羅の言つた言葉は、世の中を救つて下さる観世音菩薩に、此の度東の日本の國の王に生れて、佛の教を弘めて下さるお方に、つゝしんで御挨拶を申上げるといふ意味です。かういふわけで、此の太子の力で、いろ／＼の邪魔を拂つて、佛の教が日本の國中にひろまるやうになりました。攝津の大阪にある四天王寺、大和の奈良に近い法隆寺などは、みな太子のお建てになつた古いお寺です。

三

太子の徳がだん／＼高くなるにつれて、いろいふふしぎな事がありました。或時、甲斐の國から四足の白い、真黒な小馬を一匹朝廷に献上いたしました。太子はこの馬を御覽になると、大へんお喜びになつて、「此の馬に乗つて國の中をめぐりして来よう。」と仰しやつて、調使丸といふ召使の

小舎人を鞍のうしろにのせたまゝ、馬の脊にのつて、そのまゝすうつと空の上へ飛んでお行きになりました。下界では「あれ／＼。」といつて騒いでゐる中に、太子はもう大和の國原をはるか後にのこして、信濃の國から越の國へ、東の國々をすつかりお廻りになつて、三日の後にまた大和へお還りになりました。

また或時、太子は天子さまの御前で、勝鬘經といふお經の講釋をお始めになつて、ちやうど三日めにお經がすむと、空の上から三尺も幅のある綺麗な蓮花が降つて来て、やがて地の上に四尺も高く積りました。その蓮花を明くる朝天子さまが御覽になつて、そこに橘寺といふ寺をお立てになりました。又或時、日本の國から支那の國へ、小野の妹子といふ人をお使者にやることになりました。その時太子は妹子に向ひ、「支那の衡山とい



三尺の幅あるあの花は蓮花が降つて来たしまし

ふ山の上の寺は昔わたしが住んでゐた所だから、その時分一所にゐた僧たちは大抵死んだが、まだ三人のこつてゐるはずだから、そこへ行つて、昔わたしが始終つかつてゐた法華經の本をさがして持つて来ておくれ。」と仰しやいました。

妹子はお言付の通り、支那へ渡ると早速、衡山といふ所を訪ねて、その山の上のお寺へ行くと、門に一人の小坊主が立つてゐました。妹子がかうかういふ者だといつて案内をたのむと、小坊主はもう前から知つてゐるといつたやうに、「和尚さん、和尚さん思禪法師のお使がおいでになりましたよ。」と云ひました。すると寺の中から腰の曲つたおちいさんの坊さんが三人、こと／＼杖をつきながら、さもうれしやうにやつて来て、太子の容子をたづねるやら、昔話をするやら、妹子のいふまゝに、一巻の法華經を出して渡しました。妹

ちやうど八日めの朝、太子は夢殿からお出ましになつて、「先達て小野の妹子の取つて来てくれた法華經は、衡山の坊さんがばけてゐたと見えて、わたしの持つてゐたのでないのを間ちがへてよこしたから、魂を支那までやつてとつて来たよ。」と仰しやいました。その後また小野の妹子が二度めに支那へ渡つた時、衡山のお寺を訪ねると、前にゐた三人の坊さんの二人までは死んでしまつて、

子はこれを持つて、日本へ歸つたといふことです。

四

太子のお住ひになつたお宮は大和の斑鳩といつて、今の法隆寺のある所にありましたが、その母屋の傍に、夢殿といふ小さいお堂を作り、一月に三度づつ、お湯に入つて體を淨めて、そこへお籠りになり、佛の道の修行をなさいました。

或時太子は此の夢殿へお籠りになつて、七日七夜も外へお出にならない事がありました。いつもは一晚お籠りになつて、明日の朝はお出ましになつて、人々にいろ／＼と尊いお話をなさるのに、どうしたものだらうと思つて、お妃はじめお付きの人たちが心配しますと、高麗の國から来た惠慈といふ坊さんが、これは三昧の定に入るといつて、一心に佛を祈つてゐられるのだから、お邪魔をしないはうがいといつて止めました。すると



太子は七日七夜も外へお出にならない事がありました。



お墓の土を埋め、お供え物を焼く

一人生きのこつてゐたゞけでしたが、その坊さん
の話に。

『先年あなたの國の太子が、青い龍の車につつて、
五百人の家來を従へて、はるく東の方から雲の
上を走つておいでになつて、古い法華經の一卷を
とつて行かれました。』と言つたさうです。

五

太子のお妃は膝臣の君といつて、賢い上にお美
しい方でしたから、御夫婦仲も睦しかつたのです
が、或時ふと太子はお妃に向つて、『お前とは長年
一緒にくらすて來たが、お前はたゞの一言もわた
しの言葉に反かなかつた。わたしたちは幸福であ
つたと思ふ。生きてゐるうちさうであつたから、死
んでからも同じ日に、同じ穴の中に葬られたいも
のだ。』と仰しやいました。お妃は涙を流して、『ど
うしてそんな悲しいことを仰しやるのでございま

二二
すか。千年も万年も生きてゐて、お傍の御用をつ
とめたいとわたくしは思つてゐるのでございます
のに。』と仰しやいました。けれども太子は首をお
ふりになつて、『いや／＼、初めがあれば終りのあ
るものだ。生れたものは必ず死ぬに極つたもの
だ。これは人間の定まつた道で爲方がない。わた
しもこれまでいろ／＼のものに姿をかへ、度々人
間の世に生れ變つて來て、佛の道を弘めた。とう
とうしまひに此日本國の王子に生れて來て、佛の
道の跡もない所に法華の種を蒔いた。わたしの篤
事もこれで完つたから此の上永くむさくるしい人
間の世に住んでゐようとは思はない。』としみ／＼
お話をなさいました。お妃はなほ／＼悲しくなつ
て、とめ度なく涙がこぼれました。
ちやうどその頃でした。太子は攝津の難波の宮
へお出でになつて、それから大和の京へおかへり

なるので、黒馬にのつて片岡山といふ所までお出でになりますと、山の蔭に一人、物も食べない見え、見るかげもなく、瘦せ衰へた乞食が、蟲のやうに寝ておりました。お供の人たちは、太子のお馬先に見苦しいと思つて、あわて、追たてようとし、太子はやさしくお止めになつて、食物をおやりになり、情ぶかいお言葉をおかけになりました。そして歸りしなに、「寒いだらうから、これをお着。」と仰しやつて、召してゐた紫色の御袍をぬいで、お手づから乞食の體にかけておやりになりました。その時、

「しなてるや片岡山に飯に飢ゑて臥せる旅びとあはれ親無し。」といふ和歌をお詠みになりました。

『しなてるや』といふのは、片岡山といふ言葉に冠せた飾りの枕言葉で、歌の意味は、片岡山の上にも飯も食べずに飢ゑて寝てる旅の男があるが、

それを聞いた七人の大臣が、太子さまともあるものがそんな軽々しい事をなさるとはといつて、やかましく小言を申しました。太子はその話をお聞きになると、七人の大臣を呼び出して、

「お前たちはそんなむづかしい事をいつてゐないで、まあ片岡山へ行つてごらん。」と仰しやいました。大臣たちはぶつ／＼言ひながら、ともかくも片岡山へ言つて見ますと、どうでせう乞食の死屍を収めた棺の中は、いつか空になつてゐて、中からはふんと芳しい香が立ちました。大臣たちはみんな驚いて、太子も、此の乞食もみんな凡人ではない、慈悲の功德をこの世の中に普く知らせるために、尊い菩薩たちが假りに姿をあらはしたものだらうと思ふやうになりました。

六

さて此の事があつてから後間もなく、太子は或

可哀さうに親も兄弟もない、かなしい身の上なのであらうかといふのです。

するとその時、寝てゐた乞食が、むく／＼と頭をあげて、

「斑鳩や富の小川の絶えばこそ我が大君の御名を忘れぬ。」と御返歌を申し上げたといひます。

歌の中にある「斑鳩」だの「富の小川」だのといふのは、何れも太子のお住ひになつてゐた大和の國の奈良に近い所の名で、その富の小川の流れの絶えてしまふことはあらうとも、太子さまの今日の御情をけつして忘れる時はございませぬといふのであります。

さて太子は奈良の京へお還りになりましたが、その後で片岡山の乞食は、とう／＼死んでしまひました。太子はそれをお聞きになつて、大へんお嘆きになり、手あつく葬つておやりになりました。

お妃に向ひ、「いよ／＼いつぞやの約束を果たす日が来た。わたしたちは今夜限り此の世を去らうと思ふ。」とお言ひになりました。太子とお妃とはその日お湯を召し、新しい白衣にお着替へになつて、お二人で夢殿にお入りになりました。明るく日朝いつまでもお二人ともお目ざめにならないので、お付きの人たちが不思議に思つて、そつと御堂の中に入つて見ると、お二人は枕を並べたまゝ、それは／＼安らかに、まるですやす／＼お休みになつてゐるやうな御容子で、息を引取つておゐでになりました。お體からはふんと高い芳しい匂ひが立ちました。太子のお年は、四十九歳でした。太子のおかくれになつた日、支那の衡山からとつてお出でになつた古い法華經は、ふと見えなくなりしました。それも一緒に持つてお出でになつたのだらうといふことです。(なほり)



副將軍のクロは、耳をピンと立て、「ワン」と吠えました。
 「ウー」「ウー」「ワン」と交ると、聲を立て、居ますと、山の上からは二匹の猪が、總大將軍副將軍めがけて、ド、ド、ド、と突進して来ました。
 さア大變な戦争が始まるぞと思つて見て居ると、二匹の狼は、猪が突進して来た時、驚くべき早業を見せて、ぱつと兩方へ避けました。すると猪は駆け下りて来た勢で、其の場へ踏止る事が出来ないで、する／＼と二三間下の方へ迂りました。其時二匹の狼殿はクルリと身を翻へして、猪の後を追つかけて行つたと思ふと、何の苦もなく、ばかりりと猪の尻尾を唾へました。
 尻尾を唾へられたが、猪は身體が大きいので、其儘狼殿を引摺り乍ら、どん／＼と下の方へ二三十間も駆け降りました。斯くと見たクロは、さア大變だと思つて、矢のやうに山を駆け降りて一匹の猪の右の足へ、がくりと噛みつきました。斯うなると、……猪も一生懸命ですから、二匹共、振返つて、狼と犬とを相手に大戦闘を開始



山六爺さん (七)

沖野岩三郎

二匹の猪が、真白い大きな牙をむき出して、フウツツ！と唸つたので、伊豫の守も、ろ王も、播磨の守も、に王も、四十七人の王様や殿様も、皆なちり／＼ばら／＼に逃げて行つて、吾れ一に大きな杉の樹に這ひ上りました。
 山六爺さんと、婆アさんとは、鹿の手綱をグツツと引しめて、
 「總大將軍の狼殿、しツかり頼みますぞ！」
 「副將軍のクロさん、元氣をお出しよ！」と大聲でけしかけました。
 總大將軍の狼殿は四本の脚を、ウン！と踏ん張つて、
 「ウー」と唸りました。
 奥様の狼は尻尾を兩脚の間に引込んで、猪の方を睨み乍ら、「ウー



しました。「ウー」「ウー」「ワン」「フー」と各々に異つた聲を出して戦つてゐましたが、其うちに、どうした機みにか、狼も猪もクロも一緒になつて、一丈もあらうと思はれる高い崖の上から、真倒まに下の方へおっこちました。

「大變だ！」と爺さんが言つた時、杉の枝から殿様達も口々に、大變だ〜と叫びました。

山六爺さんも鹿の脊から飛び降りて、傍の大きな縦の木に攀ち上つて遙か下の方を見ますと、これは先ア何うした事ぞう？ 崖の下には大きな沼があつて、猪も狼もクロも、皆な其中へ落ち込んで、ばた／＼してゐるぢやありませんか。

「しめたぞ、婆アさん、早く家へ歸つて、繩と革袋だ、繩と革袋だ、早く〜……」

山六爺さんが斯う言つたので、婆アさんは早速此鹿に一鞭あて、家へとんで歸り、長い緒綱とお辨當容れの革袋とを持つて來ました。そこで山六爺さんは、杉の樹に逃げ上つてゐる四十七人に、「おうしい、殿様も王様も、皆な降りていらつしやい。大丈夫だ大



丈夫だ、猪は沼の中へ落ち込んだから……」と云ひましたので一同は、ぞろ／＼と杉の木から降りて來ました。そして、皆なが、崖の所へ行つて見ますと、總大將軍の狼御夫婦も、クロも、猪も、皆な沼の中から頭だけ外へ突き出して、眼をぎら／＼光らせて居ました。爺さんは何うして此の五正を助け出さうかと考へて見たが、どうも善い智慧が出ないので、婆アさんに相談しますと、婆アさんは暫く小首を傾げて考へてゐましたが、

「爺さん、斯うしませう、此の長い繩で、爺さんの腰を縛りませう！」と云ひました。爺さんは吃驚して、

「何だ、俺を縛る？ 俺はまだ縛られるやうな悪い事をした覚えは無いぞ。」と云ひました。

「爺さん、あなたが悪い事をしたから縛るのぢやアありませんよ、此の繩で、あなたの腰の所を縛つて、此の高い崖の上から、あなたを沼の中へ吊り下すのですよ。」

「えッ？ 俺を沼の中へ投げ込むのか。そして俺を總大將軍と一緒に殺すつもりかい。」



山六爺さんは、婆アさんに、御免なさい、御免なさい。』と云つて泣き出しました。

『先ア、爺いさん、泣くんぢやアありませんよ、話をお終ひまで聞きなさい。ね、宜いですが、斯うするのよ。此の一筋の繩で爺さんを縛つて、四十七人の殿様や王様達に、此處から沼の上へ吊り下して貰ふのです。そして、あなたは狼殿やクロさんを沼の中から引張り出して、夫れを、しかと抱いてあげるのです。そしたら四十七人が、こゝから、うんしょくくと引張り上げますから……』

夫れを聞いて、ヤツと安心した爺さんは、
『あゝさうか、わかッたく、よし！ そんなら早速、俺を縛つて呉れる。』と云つて両手を擴げました。

婆アさんは爺さんの腰の所へ、繩を縛りつけました。

さア、四十七人の大名や王様は、岩角に足を踏んばつたり、樹の根に片手を掴まつたりして、用心深く、そろ／＼と山六爺さんを、崖の上から沼の所へ吊り下しました。
爺さんは沼の所へ、ぶらりと吊るされたが、兩手を伸して、繩



大將軍の狼の鬣ッ玉の所へ、しかと抱きつきました。そして、
『ようし、引張つた！』と聲をかけますと、四十七人は、えんさ、えんさ、と掛聲をしながら繩を引張りました。すると、大將軍の身体は沼の中から、ぐツ、ぐツと抜け出して、泥ぐつになつたまゝ爺さんと一緒に、宙にぶらりと吊り下げられました。これを見た婆アさんは、大きな聲で、
『爺さん、シツかり掴まつてらッしやい。狼殿を、シツかり抱いてゐて上げなさい。』と言ひました。

四十七人は、えんさ、えんさ、と掛聲してとう／＼爺さんと狼の大將軍とを崖の上まで無事に引上げました。皆なは大喜びに喜んで、





置いて、夫れから、わッしよ、わッしよ、と聲を立て、二足の猪を沼の中から引出して、夫れを宙ぶらりんに引上げました時、爺さんは、不意に、

「おい、皆さん、繩の端を其の樫の樹の幹に縛つて下さい。私は皆さんに御相談致したい事がある。」

と言ひました。

迷惑なのは猪でした。頭へ袋を被せられた上、前脚を二本つつ縛り合されて、高い崖の上から、ぶらりと、ぶら下げられました。

夫れを見た婆アさんは、ほろ／＼と涙を流し乍ら、

「爺さん、可哀相ぢやないですか、あんなにして、ぶら下げて置いては、縛られた足が傷くって仕様が無いでせう。早く引上げて、何とかしてあげて下さいよ。」と申しましたが、爺さんは、

「いや、一寸待つて下さい。私は皆さんに御相談がある。」と云つて崖の岩の上に、ツッ立上りましたので、四十七人の王様も殿様も、皆な爺さんが何をひ出すのか知らず、と思つて、熱心に耳を傾けました。(つづく)



早速又た爺さんを吊下して、狼の奥様を抱き上げさせました。其間にクロは、早く助けて下さい、といふやうにきやん／＼と泣いてゐましたが、とう／＼クロも、さうして助けて貰ひました。

さア、残つたのは二足の猪です。今度は、爺さんの手に二つの革袋を提げて、崖から吊下されました。そして、猪の傍まで下りて行つた時、

「おい、可哀さうだが、暫く此の袋を被つてゐろよ、これはネ、俺の鹿も總大將軍も皆な一度被せられた有難い袋だぞ！」と言ひ聞かせて、夫れを二足の猪の頭へ、すっぽりと被せました。そして其の前脚を四本一緒に縛りました。

崖の上から婆アさんは、大きな聲で、

「よろしいか、爺さん、引あげますよ。」

と呼びました。

「よろしい、猪は二足とも一緒に縛りました。さア、引張つてごらん！」

爺さんが、さう云つたので、皆なは、先づ爺さんを引張り上げて



(二)「どら先廻して御馳走をよばれて来るかな」と獨言をいつて出かけて行くぢやありませんか。
 本物の徳右衛門、見れば見る程自分とそっくりですから、腹が立つていきなり飛び出して、呆氣にとられて居る狐を捕へ
 「己れ、よくも人を馬鹿にしたな」と拳骨で、さんざんはり飛ばしましたから、狐は命からがら藪の中へ逃込みました。



し.ふ.ば.あ

狐のしかへし

(一) 庄屋の徳右衛門がおよばれに行く道で、餘りくたびれたので、休んで居ますと、後の方でがさく音がします。ひよいと見ると狐が笹の葉つばを頭の上へおせて居ます。「なに、化けるか、そつと見て居てやらう」のぞかれて居るとは知らぬい狐、尻尾で地面を三邊たたいたと思ふと、庄屋の徳右衛門に化けました。



(四) へん、旦那はちやんと先にお歸だ、まぬけ今に見ろ」門の横手にかくれて入つて来る奴をいやと云ふ程、腦天を擲りましたから、あつと云つて目をまはして了ひました。

三平「こいつ、不意打を食らつて、正體も現はさずに打倒れたな」と云つて居ると座敷から狐かとび出して、べつかんこをし乍ら逃て行きましたので、初めて今度のが本統の徳右衛門とわかり、大騒になりました。

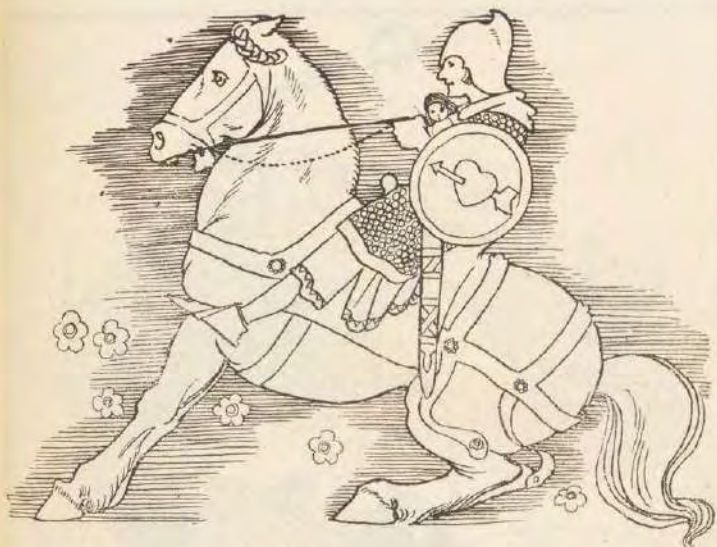


りわね



(三) あくる日徳右衛門下男の三平に「きつと昨日の狐が仇をしに来るから留守を氣を附けろよ」と申して用達に出かけました。一時間ほどすると歸つて来て。

「油断をするなよ今に来るぞ」と云ひおいて座敷へ入りました。三平は混棒を持つて待つて居ますと、やがて又向ふから徳右衛門が来ました。「そうら、来たぞ、中々うまく化けたな、そつくりだ」



リリアンのお人形

三島章道

二八

リリアンは、こんなに廣々とした、綺麗なお庭が、お家の裏のこの森の奥にあらうとは今初めて知つたのでした。廣い〜お庭の、所々には、見上げるばかりの高い樹が、形よく生えて、その高い頂上には、ひわ色の若葉が日光にキラ〜と輝いて居ます。そしてそのひわ色のみづ〜しい若葉の間には、赤や黄色に彩られた小さな小鳥が澤山、いゝ聲で歌ひ合せて居ます。下には、今まで見た事もないやうな、綺麗な花が、咲き亂れて、

その上を蝶々が、風にあふられたやうに舞つて居ます。お庭のまん中あたりには、まん圓なお池があつて、水晶のやうにすきとほつた冷たい水が、うづをまいてわきいでて、その中には珍らしいお魚が列をつくつておよいで居ます。お池のまん中へんには、高い〜鶴の首をした噴水があつて、その噴から吹き出す小さな水の玉は、深青い空にはね上つて、ルビイや、サファイヤなどの寶石をまきちらすやうです。日は高く、ひわ色の大きな樹の上に輝やいて、あたゝかい事は何とも云はれなく、いゝ心持です。

リリアンはすつかり嬉しくなつて、池の四方に廣がつた、白い道を、蝶々をおひまはしてかけた。花を取つては、髪にさしたり、して居ますと可愛い、小鳥が澤山、リリアンの肩の上にとんできては、おいしい櫻桃みたいな實を、嘴にくは

へて、もつてきてくれました。リリアンは、喜んで、一々小鳥にお禮を云つて食べました。その木實は今までたべた何よりもおいしく思はれました。リリアンは、すつかり夢中になつて喜んで居ますと、遙かかなたの、こんもりとした森の中に、ヒーンと云ふ馬のいな〜く聲がしました。まもなく白い道に、砂ほこりを上げて一人の騎手が白い、太つた馬を飛ばして走つて來ます。その騎手は、リリアンがよく繪でみる騎士のやうに、銀色の兜や鎧を着て居ます。そしてその白い馬はやはり銀色の鎧を着けて居ます。その走つてくる銀色のものは、日の光や樹の花や小鳥や蝶や、すべてのものゝ色とりとりの美しい光を溶びて、銀色は又すべての色をこまかく反射して、何とも云へなく立派にみえました。リリアンはうつとりとして、その勇ましい騎士をみつめて居ました。

二九

騎士は次第に近づきました。そして池の邊までやつて来て、遂にリリアンの前まできました。すると騎士は、ぎゅつと手綱を引きしめ、鎧をぐんとふんばり、上體を後ろへそつて、はやる馬を止めようとしました。馬はバツと砂をたて、止まり、足をばた／＼させました。すると樹の上の小鳥共は、その騎士に驚きもせず、群り飛び集つて来て、銀色の兜や鎧の肩へとまつては美しい聲でうたひました。

リリアンは何と云ふ勇ましい若者だらう、これは、きつとこの見知らぬ美しい國の王子に違ひないと思ひました。そして丁寧にお辭儀をしました。所がこの王子らしい騎士は不思議にも槍も弓も矢も刀も持つて居ませんでした。しかし、その腕には、小さな人形を抱いて居ました。彼はひらりと肩から飛びおりて、リリアンの方へ歩いて来ま

舞です。リリアンはびつくりして王子らしい騎士を仰ぎみますと、にこ／＼して居る彼はたしかにボウル兄さんです。兄さんが、こんな立派な氣高い人になつたのかと思ふとリリアンはうれしくつて、とびつかうとしました。

そのとたんに目が覺めました。リリアンはお家の裏の森の側の大きな樹の根元に、夕日の光を體中に浴びて、ついうと／＼とねむつて居たのでした。目が覺めると、やはりボウル兄さんが、家の白い百姓馬を引き、穢い着物を着て、リリアンの前に立つて居ました。しかしその顔は今夢の中でみた騎士のやうに氣高く立派で、優しくにこ／＼して居ました。それで今の王子らしい騎士が夢の中で云つた言葉は、今やはり本當の兄さんが、前で云つたのだとわかりました。

するとリリアンの鼻には、夢の中でみたさつき

した。銀の鎧はキラ／＼と輝き、肩に止つてさへづる鳥共の美しい羽はヒラ／＼と翻へりました。リリアンは、その美しさ、まばゆさと、恥かしさにうつむいて、その顔には驚きと喜びとがみちみちてにこ／＼して居ました。王子らしい騎士はリリアンの側にやつて来て、その抱いて居る人形をリリアンに渡しました。人形は可愛らしい小さな人形で、女王のやうに美しい着物を着て、その頭には花の冠を被つて居ました。リリアンは餘りの嬉しさに、その人形をかたく抱いて、その頬にキッスをしようとしますと、その花の冠が、何とも云へない、い／＼匂ひがしました。すると、今まで黙つて居た、王子らしい騎士は、

「さあ、リリアン、お前のほしがつて居た人形を持つて来てやつたんだよ。目をおさましょよ。」と云ひました。たしかにそれが兄さんのボウルの

のお人形の花の冠の匂ひがまだして居ます。リリアンはまだ夢を見て居るのかと思つて、ふと自分の胸のあたりを見ますと、小さな粗末なお人形を自分が抱いて居るのに氣がつかしました。そして其お人形が、花の冠を被つて居て、その花がい

い匂ひがする事がわかりました。ボウル兄さんはうれしさうに、にこ／＼して、

「リリアン、目が覺めたかい？ こんな所でねると、風ひくよ、さ、おゝさ。」と云ひました。それでリリアンは、

「まあ、妾、ちつとも知らずに、ねむつて了つたのよ、そして、それは／＼きれいなお夢を見たのよ。兄さん、このお人形どうしたの？」

とききました。するとボウルは、

「それかい？ それは今僕が買つて来てやつたんだよ」と云ひました。リリアンは、



「まあ、うれしい。兄さん。ありがたうよ。けれど、どうして買へたの？」とききました。するとボウルはかう云ひました。

「ほら、さつき二人で学校の歸りにね。いつもの玩具屋の店先で立って居たら、あの金持の所のお嬢様が、女中にお人形を買ってもらつて居たわ。」

「え、ほんとにきれいなお人形だつたわね。あれは女王のお人形よ、きつと。……だつて花の冠を被つて居たわ。」

「うん。そしたらお前、う妻もあんなのが買へたらなあ」つて云つたわ。」

「でも買へないわ。家は貧乏なんですもの。そして兄さんは、だつて毎日、学校の行き歸りにここを通つて見られるから買はなくつたつて同じだ」なんて言つたわ。」

「うん、だつて僕だつて欲しいものたんとあるけ

れど、買へないんだもの。けど、見られるから同じだよ。あの店のをばさんは見るだけなら、いくら見たつて叱りはしないよ。けれどね、それから家へかへつてから、僕はお母さんと、水車小屋を掃除したんだよ。そしたら隅つこの方に、家の牝鶏の一羽がね。どうしたのか糞の中に卵を一ダースも産んでためてあつたんだよ。それでこの卵は僕がお母さんのお手傳ひをして水車小屋を掃除したから見附つたんですから僕に下さいと、お母さんに願つて僕もらつたんだよ。それで僕はい、事を考へたのさ。い、事つて、お前のほしがつてるお人形を買つてやらうと思つたんだよ。それで僕はすぐ町に、卵を持つて行つて、それを賣つて得たお金で、あの玩具屋へ行つて、お人形を下さいと云つたんだけど、あの金持のお嬢さんの買った女王のお人形は……。あれ高くて、お金が足りない



リアンの彼方に飛びのりました。二人の兄妹は、仲よく馬にのつて家の方へ歩きました。妹は馬の脊中に兄さんに、今の夢の話をしてきかせました。その時お母さんは夕飯のお仕度をすませて、歸つてくる二人を、小さな小屋の入口に立って、手招きをして居ました。二人の頭の上には、薔薇色をした夕日が斜めに輝いて、澤山の鳥もねぐらに急いで、鳴きながら飛んで居ました。(なはり)



「安いだつてさ。……それで安いのを買ったんだけど、安いのは花の冠を被つて居ないんだろ……。それで僕はそれから、家の馬を小川に洗ひに行つた時、野原で花を集めて冠を作つて来てやつたよ。今丁度野原からかへつて来ようとしたら、お前がこんな所でねて居るので、吃驚してすぐ馬からおりて、お前に人形をだかしてやつたのさ。」

「まあ、なんていゝ兄さんなんぞでせう。難有うよ。兄さん。まあ、この花の匂ひのいゝ事……ね。」

「だけど、その人形は安いんだよ、高いのはかへないんだもの。」

「安くだつて、兄さんのくれたものなら高いのよ。」

りいゝわ。それにあの高いお人形の花は作り花だからこんな生々した、いゝ匂ひは、きつとしやしないわ。けれどこれはこんないゝ匂ひがするんだもの、あのお嬢さんのよりはよつほどいゝわ。」

「うんさうだ。さうして其花が萎んだら、僕が又新しい匂ひのいゝ別の花をとつてきて冠を作つてやるよ。さうすれば其お人形は一年中いゝ匂ひの冠を被つて居るんだもの、すつといゝだらう。」

「えゝ、ありがたう兄さん。すつといゝわ。」

かう云つてリアンはとび上つて、小さな兄さんの首玉にかじりついてキッスしました。そして、

「兄さん、今、妾それはきれいな夢を見て居たのよ。さあ、かへりながら話して上げませう。」

と云ひました。ポウルはリアンを抱いて、おとなしい白い百姓馬にのせて、自分も又ひらりと、



かみなりころく／＼鳴つたらば、
 芋の葉をたべてゐた、
 てんとう蟲だまし、
 ころく／＼ころりと、
 ころんだ。



かみなり
 若山喜志子

かみなりころく／＼鳴つたらば、
 ひるねの螢がおどろいて、
 よしの葉つばにかくれた。

支那伊蘇普物語 (三)

楠山正雄



(一) 天の高さ
一寸法師が大男に向つてたづねました。
『お前さん、一體天までどの位高きがあるか、知つてあかい。』
『誰が知るものか、馬鹿々々しい。』と大男はいひました。
『だつておれに比べれば、お前さんの方が幾らかでも矢に近いからさ。』と一寸法師は言ました。

(二) 二人の勇士

東の國から出て来た勇士と、西の國から出て来た勇士が、武者修行の途中、山の中で出逢ひました。二人は力も武藝も同じ位にすぐれた強い若者でした。
『君と僕と、天下の二豪傑が友達になるといふのは實に愉快極まることだなあ。大いに飲んで、兄弟の誠を堅めようぢやないか。』
二人はこんなことをいって、そこを見まはすと、岩の間から冷たきうな泉がふき出してゐました。とりあへずこれをお酒のつもりで飲みはじめましたが、こんどはお酒がありません。
『酒の肉もなかり、甘さうだな。』ともう一人がいひました。
そこで二人の勇士は刀を抜いて、お互ひの體かっ一片づつ肉を切つてお酒のお肴にしました。刀が肉に刺さるたんびにお互ひにそれは痛いのですけれど、痛いといつては、勇士の名折れだと思つて、顔をしめあへず、死のまで痛いとはいひませんでした。
血氣にはやつて、むやみに強いことばかり好きな人には、これに似た酒があるものです。



(三) 無くなつた羊
破大きな百姓の家に割つてある羊が一匹山の牧場から迷つて行つてしまひました。主人はのぼせ上がつて、息子たちはじめ下女下男から小作人のこらす駆け出して羊の行方をさがしにやりました。それでも安心がならなくつて、お隣の百姓の家からも大勢人を借り出して、羊の後を追はせました。それをお隣の主人が笑つて、
『どうしてたつた一匹の羊にそんな大勢の人がいるのです。』といひますと、羊の主人は、
『山の路はたくさんあるから。』と答へました。その中日がくられて、大勢がそろそろどやどや歸つて來ましたが、羊はとう／＼誰にも見つかりませんでした。
『山の中は何しろ枝路が多くつて、迷つてしまひました。』とみんなは口々にいひました。
ですからいろ／＼のことに氣が散つて、何一つ出来上がらないことを、路多くして羊を失ふといふのです。

(四) 河と海

秋になつて毎日長雨がつせいたものですから、河の水がすつかりあふれて、兩岸の家も田畑も、そこで遊んでゐた牛や羊のむれも、みんなどこへか見えなくなつてしまつて、見わたす限り一面に濁つた水が、まん／＼溢へられてゐました。このすばらしい景色をながめた河の神がとくらしい顔をして、
『これでは世界中おれの領分になつたと見える。』と高慢なことをいひながら、どん／＼東の方へ流れて行きますと、とう／＼河が盡きて海へ出ました。見るとそこには、岸もなければ路もありません。水と空が一つになつて、果てしのないひろい景色を見てゐる中に、ぼうつとして氣がとほくなりさうです。河の神はその時つく／＼ため息をついて、上には上のあるものだと思ひました。
海を眺めて歎息するといふ意味の『望洋の歌』といふ言葉はこれからはじまつたといひます。





一ノ谷の合戦

(歴史童話)

窪田 空穂

大手の方の大將軍の平知盛は、範頼の大軍を相手に戦つてゐました。その時、敵の方から使が来て、
「手前どもは、以前よしみのある者ですから申上げますが、まだ後の方は御覽にならないやうでは
ありませんか。」
と注意されました。さう云はれて初めて振り返つて見ると、城は一面の黒煙となつてゐました。
「おい、西の手が破れた。」
さういふと一しよに、軍勢はぐずれ立つて、我

れ先にと逃げ出してしまひました。

知盛は、自分の子の知章といふ十六歳になる若武者と、侍の監物頼賢との三騎になつてしまひました。この上は天皇の御船へ参らうと思つて、汀づたひに落ちてゆきました。

そこへ敵と見える十騎ばかりの者が、馬を驅けさせて追つて來ました。それと見ると頼賢も引返し、弓で、真先に進んで來た旗持を射落しました。その隙に敵の大將らしい者は馬を躍らして進み寄り、組まうとするらしく知盛の馬と押並びました。知章は、父を打たせまいと思つて、兩方の馬の間に進み入つて隔てとなり、そしてその武者と組合つて、馬の上から落ちました。知章は敵を組伏せて首を取りました。そして起ちあがらうとするところを、敵の家來に不意打をされて打たれてしまひました。頼賢は驅け寄つて、又その敵を打つて

仇を取りました。頼賢は、矢のあるだけでは矢を射、なくなると刀を抜いて戦つたが、左の膝頭を敵に射られて、起つことができなくなつて、坐りながら戦つて切り死にしまひました。

その間に知盛は其處を逃げ延びました。そして馬を海に打入れて、二十町あまりも泳がせて、天皇の御船に着きました。

船の中は人で一ばいで、馬を入れる場所がありませんでした。それで馬を陸の方へ向けて追ひかへしました。

阿波重能はその馬を見て、

「お馬が敵の物になつてしまひませう。射殺してしまひませう。」

と云つて矢を持って起つと、知盛は、
「たとひ誰の物になつてもいい。たつた今、私の命を助けて呉れたものだ。殺すといふ法はない。」

と云つて止めました。馬は主人との別れを惜んで、暫くの間は船から離れませんでした。やがて沖の方へ向つて泳ぎ出して、だん／＼遠くなつて行きましたが、渚近くなつて、足の立つ所へ來ると、そこへ立つて船の方を振り返つて見て、二度も三度も高く嘶きました。この馬は白河法皇からいたゞいた物でしたが、また法皇の御厩へ戻されました。

知盛は宗盛の前へ出て、涙を流しながら云ひました。

「知章には先立たれてしまひますし、頼賢は討たれてしまひましたので、心細い氣がいたします。それにつけても、子は親を討たせまいと思つて敵と組んだのを見ながら、親はその子を助けようともせずに出て來たのだと思ひますと、我ながら何うしてそんなことが出來たのかと思ひます。こ

とたゞ二騎で、船に乗らうと思つて、渚が船へ落ちて行くところを、庄高家、梶原景季などが見つけて、好き敵と思つて、追驅けて來ました。落には船は幾らもあるが、餘り急に追はれるので、それへ乗り移る暇がなく、ひた逃げて西へ向つて逃げて、とう／＼須磨までも逃げました。敵は追つては來たが、重衡の馬が好いので、とても追着けさうにもないので、梶原景季は、遠矢ながら覗つて射ました。矢は馬にあたつて、馬は弱つて來ました。それと見ると盛長は、自分の馬をよこせと云はれるかと思つて、鞭をあて、先へ逃げました。「何うしたのだ盛長、私を棄て、何處へ行くのだ。さういふ約束ではないか。」

重衡がさういふのを、盛長は聞えない振りをして、やみくも逃げてしまひました。重衡は弱つた馬を海へ打入れました。身を投げ

四二
れが他人のことだつたら、何んなに悪くいふこと
でせう。併し自分のことになると、それをするの
を思ひますと、よく／＼命は惜しがつてゐるもの
だといふことを、今更のやうに思ひ知りました。
皆さんの思はくも恥かしいことです。」

宗盛は慰めて、

「武藏守（知章）が父の身代りになつたのは、誠に有難いことです。手腕も利き、心もしつかりしてゐて、立派な大將軍でしたに。たしか、あの清宗と同じ年で、十六でしたね。」

と云つて、自分の子の方を見て、涙ぐみました。それを聞くと、そこに居合せた者は、皆涙をうかめました。

十四

大手の關將軍の平、重衡は、乳兄弟の後藤盛長

ようとしたが、そこは遠淺で、それもできないので、腹を切らうとしてゐると、高家は追着いてしまひました。

「御率性です。何處までもお供をしようとしてゐるのです。」

と云つて、重衡を捕へて自分の馬に乗せ、鞍の上へ縛しつけて引返して來ました。

盛長は逃げ延びて、紀伊の熊野の山へ隠れてしまひました。

十五

西の手の大將軍の平、忠度は、百騎ばかりを引連れて、落ちついて、靜かに落ちて行きました。それを見つけて、好敵と思つて、岡部忠澄は追

驅けて來ました。

「これは好い大將とお見懸けする、敵に背後を見

せるは御卑怯だ。返したまへ。」

さう云つて近づくと、『これは身方の者だ。』

と忠度は云ひました。

さういふ時、齒を鐵槩で黒く染めてゐるのを忠澄は認めました。

身方に鐵槩をつけてゐる者はない、何うしてもこれは平家の大将だと思つて、忠澄は組みつきました。それを見ると、忠澄に随つてゐた百騎ばかりの勢は皆逃げてしまつて、一騎も助太刀する者



はありませんでした。

しかし力持で、手腕も達者な忠澄は、忠澄を捉へてしまつて、

『惜い奴めが、身方だと云つたら云はせておけばよいに。』

と云つて、馬の上で二刀まで刺し、馬から下りて今一刀刺しました。前の二刀は鎧で通らず、後の一刀は、通つたが浅疵でした。それで忠澄は相手を壓へつけて、首を切らうとしてゐる所へ、忠澄の家來が駆け寄つて、忠澄の右の腕へ切りつけ、臂の所から切つて落してしまひました。

『少し、退いて居ろ、最期の念佛をするから。』

忠澄はさう云ひながら、忠澄を掴んで投げやつて、そして念佛を始めますと、忠澄は後から忠度の首を切つてしまひました。

忠澄は、その人を誰とも分らなかつたが、鯨(矢

を入れる物)に附いてゐた紙に、

行き暮れて木の下かげを宿とせば、

花や今宵の主人ならまし。忠澄

と書いてあつたので、初めて忠澄であつたことが分りました。

十六

一の谷の戦はあらし終つた頃でした。熊谷直實は、今頃は平家の大将が、船に乗らうとしてゐるだらう、組打をして手柄を立てようと思つて、汀の方へ向つて行きました。見ると、今、騎馬武者が一騎、海の上に浮んでゐる船の方へ行かうとして、馬を海へ打入れて、泳がせて行くところでした。後姿から察すると、立派な大将と見えました。直實は、

『それへ行かれるは、好い大将軍と思ひます。敵

に背後を見せるのは御専法です。お返しなさい。」と云つて、扇をあげて招きました。

すると相手は、招かれたのに應じて引返して来て、汀へ上らうとしました。待ち構へてゐた直實は、すぐに馬を押並べて組みつき、組合つたまゝ、馬から落ちました。直實は上になつて組伏せたので、首を取らうとして顔を俯向けて見ると、薄化粧をして、鐵漿を附けてゐました。年はちやうど自分の子の小次郎ぐらゐで十六七歳で、そして如何にも美しい顔でした。

「あなたは何といふ方ですが、お名のり下さい。お助けませう。」

「聞かれるあなたは誰なんです。」

「申す程の者でもありませんが、武藏の者で、熊谷直實といひます。」

「それでは、あなたに取つては好い敵です。名の

りはしないが、首を取つての上で人に訊いたら、見知つてゐるでせう。」

深い挨拶をされると、直實は感心してしまひました。如何にも立派な大將だ。今この人を一人討つたからとて、負けた敵が勝ちもしなければ、助けたからとて、勝つた身方が負けもしない。今朝一の谷で、小次郎が浅い疵を一つうけただけでも、自分には心配になつたものを、かうした子が討たれたと聞いたら、その親は何んなにか嘆くことだらう。助けよう。直實はさう思ひました。そして誰も見て居なければいゝがと思つて、後の方を振り返つて見ると、土肥だの梶原だのが五十騎ばかりで此方へ来る所でした。

それを見ると一しよに直實は、涙をばろ／＼とこぼしました。

「あれを御覧なさいまし、身方の勢があつたやうに



居りますから、とても此處をお逃げになることは出来ません。同じことなら、この直實の手にお懸けまをして、後々の吊ひも致しませう。」

「かうなつたからは、早くお討ちなさい。」

直實は如何にも可哀さうで、何處にも刀をつける所がないやうな氣がしました。暫くはほんやりしてゐましたが、さうしてばかりも居られないので、泣きながら首を切りました。

あゝ、武士ほど悲しい者はない。かうしたこと
をする家に生れなかつたら、こんな辛い思ひはし
なかつたらう。可哀さうなことをしてしまつたも
のだと思つて、顔へ袖をあてゝ泣いて居ました。
討つた首を包まうと思つて、着てゐた直垂を解
くと、腰に、錦の袋へ入れた笛を差してゐるのを
見つけました。

あゝ、今朝城の中で笛の音がしたが、あれはこ
の方だつたのか。今、關東の軍勢は何萬騎とある
が、戰場へ笛を持つて来る人は一人もあるまい。
高貴の人は何處か優しい所があるものだ。と思つ
て、その笛を添へて首を義經に見せました。見る
程の者は、皆涙を落しました。

それは經盛の末子で敦盛といつて、十七歳だと
いふことが、後になつて分りました。笛は鳥羽院
からいたゞいたもので、家に傳はつてゐた寶だと

いふことも分りました。

十七

この合戦で、平家の方は、大將の討たれたもの
が十八、侍は二千人以上もありました。燒跡の一
の谷の城のまはりから濱邊へ懸けて、人や馬の死
骸は山のやうで、流れた血で、一の谷の笹原の青
いのも、薄紅にかはつてしまひました。

平家の軍勢は、今は船に乗つて逃げたものだけ
となりました。

船は沖の上に浮んで、小さくちりちりになつて、
何處へ行くといふあてもなくなつたゞよつてゐたらしく
見えました。その船は、次第に霞の奥におぼろ
になつて行きました。そして、海の遠くから来る
夜の闇のなかに、全く見えなくなつてしまひまし
た。(長篇歴史童話の内、二ノ各合戦をばり)



俄大名

横山壽篤

むかし山城の國に、灰吹屋慶六といふ人がゐま
した。親もなければ子もなかつた一人ぼつちで、
大層貧しい暮しをしてゐましたが、慶六の先代ま
では、近郷近在に聞えた大金持でした。
「お前さんの内は、大したお金もちぢやつた。何
でも小判がお倉の中に、うなる程あつてな、その
小判の錆を磨くものが、年中五人も七人も雇はれ
てゐたものぢや、それでも磨ききれないで、後か
ら／＼錆が出来たと云ふ話ぢや、豪氣なものだあ
ね。」と年とつた人が、慶六に話して聞かせたこと
がありました。

慶六は、ある夜不思議な夢を見ました。それは
自分の家のお庭にある榎の根元から、お月様が出

て、そのお月様の中で、自分が餅を摘いてゐるではありませんか。その餅が臼からあふれて、千切れてはボタ／＼下界へ落ちて行きます。あれ／＼といふ間に、餅だと思つたのがピカ／＼と光る小判に變つて、さつきお月様が出て来た榎の根元へ皆落ちて行くのでした。

慶六は朝起きて、昨夜の夢を思ひ出しながら、お庭に出て見ました。そして榎の側に立つて、榎の根元を見つめました。暫くすると鍬を持出して、根元を掘り初めました。

ガツシと打ちこんでは、バラ／＼と土を掘りおこしました。ガツシ、バラ／＼。ガツシ、バラバラ……

「え、ッ、馬鹿々々しい。」と慶六は、自分のしてゐることが可笑しくもあり、馬鹿々々しくなつたので、やけ半分に一鍬力を入れて打ちこみました。

「もものか。ちやが待てよ、夢でも何でも構はぬもつと小判を掘出してやれ。」

慶六は、自分でも何が何だか分からなくなつたので、むちやくちやに榎の根元を掘りました。すると小判がザク／＼と出て来ました。

「私は花咲爺の夢を見てをるのぢやな。」といつて鍬の柄に身をもたせて、足許一ぱいに散らかつてゐる小判をぼんやり見つめました。

やがて朝日が出ました。小判は美しく輝きました。慶六はもう夢だとは思ひませんでした。

「有り難い、有り難い、御先祖様が、此處へ小判を埋めておいて下されたのぢや。有り難う御座ります。」

と云つて、誰に云ふともなくお禮をいひました。

すると今までは違つた手ごたへがして、瓶の片らが出て来ました。

「何ちや、瓦か……うん瓶の片ぢやな。」

と云ひながら、又一鍬掘りおこしました。其とた

ん、

「おや、おや／＼。」

といつたなり、慶六は腰を抜して尻餅をつきました。それもその筈です、よもやと思つた小判が二三枚、土の中から轉り出たのです。

「こりやあ夢ぢや、夢ぢや、こんな馬鹿々々しいことがある譯がない、私は昨夜から夢を見つゞけてをるのぢや。」

と云つて、自分で自分の頬を、ひどく抓つて見ました。

「あ、いた、た、や、やつぱり痛いわい。しかし夢ぢや／＼、夢のつゞきぢや、こんなはんどがあ

かうして灰吹屋の慶六は、ひよつくりお金持になりました。そこで、早速紋付の羽織を拵へました。袴を買ひました。刀を買ふ、扇を買ふ、馬を買ふ、何でも欲しいものをみんな買ひ集めました。

それから今度は京見物に行きたいと思ひました。一人旅は面白くないし、人のお供をするのも詰らないと色々考へた揚句、お金を出して大勢の人を雇うて、大名行列の真似をして、京へ上らうと思ひ付きました。そこで大名行列のお供になるものには、衣物も旅の費えも皆出してやつてその上小判を一枚づつやると云ふことをふれました。

「それは面白い、是非私をお供に加へて下され。」と慶六を知つてゐるものはみんな、大名行列のお供になりたいと云ひました。

慶六は、袴を着けて榎の下に立ちました。大

名行列に加はりたいと申出でたものは、みんな
で七十五人ありました。

「あゝ、御苦勞であつた。七十五人だな、然らば
追つて沙汰を致すから、今日は是れにて引取つて
まからうぞ。」と慶六は、もうお大名氣どりで、お
大名のやうな言葉を使ひました。そこで、皆も

「へい。」

と云つて丁寧なおじぎをして、其日は家へ歸りま
した。

三

愈々大名行列をして京へ上る日が來ました。

慶六は、それまでに古着屋を呼んで、お供のもの
の衣裳をすつかり調べておきました。

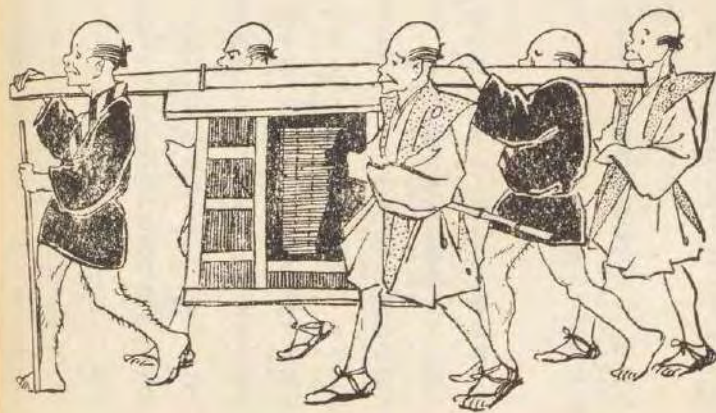
慶六はお大名のやうな服装をして、お駕に乗り
ました。七十五人のお供のものは、袴を着けた

もの、奴の姿のもの、羽織袴のもの、種々雑多で
した。刀を一本だけさしたものと、まるきりさゝ
ぬものと、刀の代りに杖をさしたものとがありま
した。「下にゐろ——、下にゐろ——」と云ふ譯
にも行きません。たゞ黙つて、行列は進んで行き
ました。何だか餘り威勢がないので、大名行列
らしく見えるかどうかと、お駕の中の慶六は心配
し初めました。

大分行列が進んだ時のことでした。遙か彼方に
道の兩側へ土下座をしてゐるものが四五人見えま
した。慶六は急に元氣づきました。

「うまい——、矢張大名行列に見えるのぢやな
感心な奴ぢや。」

と獨言をいひながら、お駕の中で威儀を正しまし
た。さうかうするげに行列は、土下座をしてゐる
道の真中を通り掛りました。すると、土下座の連



中が、俄に聲を揃へて、「右や左の旦那さま、どうぞお助け下さいませ。…」といひ出しましたので慶六はびつくりしてしまひました。それはお菰だつたのです。

「無禮者控へろ。」

とお供の一人がいひました。

「者共急げ〜。」と慶六は、荒々しく申しました。

大名行列らしく見えなやかなあ、と又慶六は氣にしました。「いや、今のはお菰だ、お菰なんぞに、何が分るものか。」と心の中で云つて、自分の心を慰めました。

四

この變てこな行列は、やがて小さな町にさしかかりました。するとさすがは町だけあつて、道の兩側に大勢の人が出てゐて、行列の來るのを、物



るのだ、と云つたやうに、エヘン、エヘン、エヘンとたてつゞげに咳をしました。

「何ちや〜、大層な行列ぢやなあ。」と又町の人云つてゐるのが聞えました。

「エヘン！」と慶六は段々大きく咳をしました。

珍らしさうに待つてゐました。

「感心々々、矢張町のものは開けてをる。」とかう思ひました。

「何ちや大變な行列ぢやなあ。」と一人が云ました。

「ほうら、お駕が來た。お駕の後にもあのやうに大勢の人がついて來る。」

と誰かといひました。

「一體何ちやらうなあ。」と又一人が云ひました。

「はて知れたこと、お葬ひぢやわい。」

お駕の中の慶六は、それを聞いて、がっかりしました。折角大金を掛けて大勢の人を頼んで、趣向を凝した行列を、お葬ひとは情ないと思ひました。

行列はがや〜と騒いでゐる町の中を進んで行きます。慶六はお葬ひと見られたのを、口惜しがつて、今度は、お駕の中には生きた人間が乗つてゐ

「お駕の中は病人らしいな。」と、今度は病人にしてしまひました。

慶六は、おや〜と扇子で自分の額をポンとたたきながら「私が咳をしてゐたので、病人だと思つたのぢやな、馬鹿にしてゐる、面白くもない。」といひながら、お駕の籠を手づから巻いて、そこから顔をニユツと出して、

「大名に對して無禮であらうぞ。」といつてがやがや云つてゐる見物を、グツと睨みました。すると「これはお葬ひでも、病人でもない、狂人ぢや、狂人ぢや、皆の衆、氣をつけてゐなされや。」といひましたので、慶六はもう堪りかねて、

「馬鹿奴郎！」

と大聲に怒鳴りました。

「それ御覽じろ、立派な狂人ぢや。」と、たうとう慶六を狂人にさめてしまひました。(をばり)



所が、あいにくも、厩が近くになかったので、遠くの方まで行かなければなりません。おまけに、その日は大變暑くて日は、かんかん照りつけるし、それにチユエノが中々重いと来てゐるので、枯草などを荷ぐのとは違ひ、流石のお百姓もすつかり弱つて了りました。そこで、外の兄弟が代り合つて荷ぎましたが、行けば行く程重くなるので、汗ばかりかいて、へとへとに疲れて了りました。

三人は喉をから〜に乾して、溜息ばかりついてゐました。と、幸ひ途中で、酒場があつたので、お百姓たちは生返つた様に喜びました。かついで来た袋は入口の腰掛けの上へ投り出して、一と思つきに酒場へ入りました。お百姓たちは、その時、一人の年とつた乞食が、入口の日蔭にゐたのに氣づきませんでした。

お爺さんの乞食は、そよ〜と吹く風に吹かれ乍ら、いゝ氣持ちになつて、酒場で貰つたのか、それとも他處で貰つたのか解らないが、何かおいしさうに食べてゐました。

機敏なチユエノは、すぐと誰か傍で、ムシヤ、ムシヤ食べてゐる物を聞きつけたので、お百姓たちが酒場へ入つてゐるのを幸ひ、急にうん〜うなり聲を立てました。すると、乞食は、

「おや、何んだらう。」と、獨言のやうにいひ乍ら、袋の傍まで来て、



凸坊新画帖

欺された三人兄弟のお百姓が、つか〜と入つて来ました。今度はチユエノも逃れる路がありませんでした。

チユエノは、丁度その時、眠つてゐたので、お百姓たちが入つて来た物音で、漸く目を覺したのです。お百姓たちは、有無をいはず、兩側からチユエノを引捕へて、持つて来た大きな袋へ入れて了りました。それから袋の口は、しつかり結びつけ、惣領のお百姓がそれを肩にかついで、チユエノを溺れ死に死なさうと、厩の方へ急ぎました。

羊の偽物 (つゞき)

齋藤 佐次郎





聞耳をたてゝおましたが、確かに少年のうなり聲だと解つたので、
「おい、何んだつて、こんな中へ入れられてゐるんだい。」と、きゝま
した。

「今酒場へ入つた人たちが、僕の事を坊主にしようつて言ふんだ。だ
けど、僕がいやだつていふもんだから……。」と、チュエノはわざと
ペンをかきました。

「さうかい……。」と、乞食は驚いたやうな顔をして、
「だがお前、坊さんは、そんなにいやなものぢやないせ。」と、いひま
した。

「でも、僕は誰が何んといつたつて、いやなんだ。しかし、小父さん、
そんなに言ふなら僕の代りに袋へ入つたらどうだね。」と、チュエノが
いふと、乞食は思ひの外喜んで、

「そりやア、何よりの事だ。」と、いひ乍ら直ぐと、代りに袋へ入りま
した。

そこで、川の中へ投げこまれたのはチュエノではなくて、可哀さう
な、爺さんの乞食でした。

二

悪癖になりました。兄弟のお百姓は、おかみさんのお葬式をしまし
た。式をすましてお寺からの歸り途、物思ひに沈みながらやつて来る
と、ひよつこり、チュエノに出ありました。チュエノは、素暗しく澤
山の羊をひつばつてやつて来たのです。

お百姓たちは、チュエノの姿を見るなり、膽をつぶして黙つて立ち
すくんで了ひました。やゝ暫くしてから惣領のお百姓が、

「やい、悪少年め、昨日貴様を川の中へ投げ込んでやつたのぢやない
か。それなのに、どうしてそんな平氣な顔して、びん／＼してゐるん
だ。」

「へエ、そんなに不思議に見えますかね。」と、チュエノは、自分の方
が却つて驚いたといふ様な顔をして見せました。「さうでせう。あなた
方は此の世界の下に、もつと／＼綺麗なお金のどつさりある、いゝ
世界のある事を知つてゐないんだから。ねエ、お百姓さん、あなた方
が昨日私を投げこんで下さつたあの川の底ですが、あそこが丁度その
いゝ世界なんです。私は行つた當座一寸變でしたが、その内に自分
の周囲を見廻して、一體どんな事があるのか、よく見たのです。する
と、すぐにかういふ事が解りました。私が落込んで行つた場所のすぐ
傍で、羊の市が立つてゐたのです。傍に見てゐた人のいふには、この



「えい、知り過ぎる位知つてゐますよ。」
 「よし、では貴様がもし、俺たちの大事な羊やかみさん達を殺させた罰を受けたくないと思ふなら、馬の市が立つ丁度その場所を見はからつて、俺達を川の中へ投げ込んでくれ。」
 「よござんすとも。では、めい／＼大きな袋を持つてお出でなさい。それから、川へ突出てゐる岩の處まで私と一しよに來るのです。私はそこから、あなた方を川の中へ投げ込みます。さうすると、あなた方は丁度馬の脊中へでも乗るやうな具合で落込みますよ。」
 お百姓たちは、急いで袋を持つて來ました。そこで、チユエノは、一人々々川へ突落しました。三人とも、二度と浮上つては來ませんでした。
 一體お百姓たちが落ちて行つた市の立つ處といふのは、何處なのでせう。それを知つた者が一人もありませんでした。
 馬鹿なお百姓の事は、それでいゝとして、さてチユエノのやつは、その先きどうなつたでせうか。その事も、はつきり知つてゐる人はありませんが、どうせ悪智慧の達者な奴の事ですから、確な事はなかつたでせう。(なほり)



街では毎日何處かで、馬か何かの市が立つのだからです。ですから、幸と馬の市の立つ邊を目あてに、もう一度川へ投げ込んで貰へれば、私はすつかり身代が出来るのです。」
 「それぢや、貴様は川のどの邊に馬の市が立つかはつきり知つてゐるのか。」





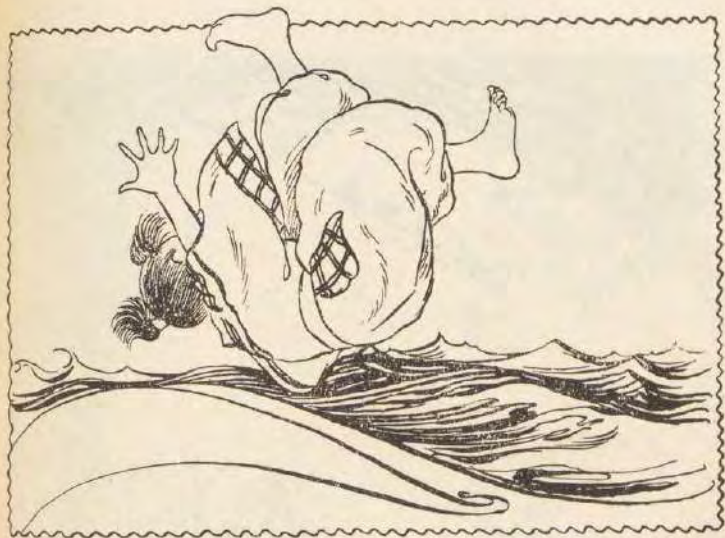
見たたとおもへば、ゆうらんと、
 ゆり落される面白い。
 青い銀杏も、榛の木も
 芥子も、ダリヤも、石竹も、
 みんな揃つて叩頭する、
 ぶうらんこ、ぶうらんこ、
 ぶうらんこを漕がう。
 遠い山には木が一本、
 街にはちひさい馬車二臺、
 人形のやうな人なかを、
 犬が三疋驅けてゐる。
 ぶらんこは面白い。



ぶうらんこ、ぶうらんこ、
 ぶうらんこを漕がう、
 お舟よりも軽く、
 鳥のやうに高く、
 ぶうらんこ、ぶうらんこ。
 高くのぼれば塀越しに、
 遠い山も見える、
 近い街も見える、

ぶうらんこ

茅野 雅子



琴の太郎

(長篇童話)

小山内 薫

六四

前號までの梗概 太郎といふ少年は、魔王の一人娘の海原姫の遊相手となつて、そこで暮すことになりました。暫くすると、二人とも魔の世界が嫌になつたので、太郎は姫を連れて自分の家へ歸りました。ところがいく日もたらないうちに、黒羽の矢が太郎の家の門に立つやうになりました。姫はそれを見ると、皆のとめるのも聞かないで急いで魔の世界へ歸りました。ある日の夕方、一羽の白鳥が姫の手紙をもつて來ました。——只今魔がおこつて太郎さんの繪姿を油で煮てゐます。あなたのお命がなくなりませう。早く來てどうかして下さい。——と書いてありました。太郎は驚いて、また家をぬけ出て魔の世界へ行き、家來になるから許してくれと魔王にたのんで、やつと許されました。ある日、一艘の小舟が魔の海へ近づいて來ました。それには太郎の家の家來の茂右衛門が乗つてゐました。太郎が驚いて見てゐるうちにもう強きこまれて了ひました。太郎は急いで、甲板の上にあつた琴を海に投げて、それにすがり家へ歸るやうに言ひました。

六

太郎はやつと茂右衛門を助ける事が出來たので、一安心はしましたが、今度は自分の體が危なくなつて來ました。ついこなひだ油の鍋の呪を許されてから、まだたつた四日しか立たないのに、助けてはならない人を助けてしまつた——魔は怒つて今夜甲板へ出て來ると、きつと自分を茂右衛門の代りに油の海へ投げ込むだらう——と、かう覺悟をしました。——自分の命も夜までだ。もう姫にも逢はれまい。今夜を最後に、もう目にはなんにも見えなくなるだらう。耳にはなんにも聞かえなくなるだらう。姫の琴も、もう聞く事は出來まい——

——神に悪魔調伏の願を立てると、茂右衛門に言ひつけはしたが、いくら願をかけたところで、

とても今夜までに御神靈はあるまい。まして、父上や何か來たところで、人間業で助からうとは思へない——

——今夜が最後だ。死ぬ前に、自分が油の海へはいつても、姫の體に何の異變もないやうに、神様へお願をして置かう——と、太郎は東の方を向いて、方々の神々を祈り始めました。

一生懸命に拜んでゐる内に、日もだん／＼暮れかゝつて來ました。太郎の命のお終ひになる時もある／＼迫つて來ました。下では、魔者どもがそろ／＼勢づいて來て、がや／＼がや／＼言つてゐます。

西の空から月が出て、その光が油の海へうつると、一人黒い影が甲板に現れました。續いて一人、また一人。魔者の数は残らず甲板の上に揃ひました。その真ん中で、姫は魔王に手を取られて、泣

六五

いてゐます。

魔王が太郎を指さしますと、手下の魔者どもは無言で太郎を擁ぎ上げました。太郎は目をつぶつて、一心に神を祈つてゐました。姫は魔王の袖に絶つて、しきりに太郎の命乞をしてゐますが、魔王はなか／＼聞き入れません。

黒い影の魔者どもは、太郎を海の中へ投げ込む用意をしました。魔王が厭な笑ひ方をして、梟のやうな聲を立てると、それを合圖に、魔者どもは手を揃へて太郎を油の海へ投げ込みました。

油の海は音もなく口をあいて、太郎をばくりと呑んでしまひました。

姫は太郎の姿の見えなくなるのを見ると、船端へ駆けて出ました。そして、

「あたしも死にます。」
と、飛びました。併し、魔王は手もなく姫を捕ま

替くは魔者の業よ姫ばかり聞かえて、あたりはしんとしてゐました。

その晩の夜半の事です。

空高くかゝつてゐる月の光が一しほ白く輝きました。波の上に數千となく浮いてゐる月の影が、不思議にすうツと一つに集まりました。丁度、海の上にも空にあるやうな月が一つ出来ました。

不思議はそればかりではありません。やがて、その海の月が二つに割れて、その中から、眞白な着物を着た丈五寸ばかりの人が飛び出しました。やがて、又一人飛び出しました。やがて、又一人。やがて、又一人。とう／＼十五六人、さういふ小さな人が飛び出しました。

その人達は、波の上をひよい／＼飛んで、太郎と姫が沈んだ水の上あたりまで来ると、一人が腰

へてしまひました。

やがて、魔王は手下を集めて、酒宴を催しまし

た。黒い影のやうな人達は、月の光を浴びながら、飲みました、飲みました、飲みました。だん／＼酔が廻つて来ると、もう姫の事などはみんな忘れてしまひました。

その間に姫はそつと立つて、船の方へ行くと、お月様に向つてかう祈りました。

「どうぞ太郎さんの側へ行つて遊ばすように。どうぞ父様の悪い心が直つて、人間に變りますように。」

さう言ふかと思ふと、いきなり身を跳らして、海の中へ飛び込みました。油の水は姫と太郎を呑んでしまつたのです。そして、小波を立て、笑つてゐるのです。

に纏めてゐた細い紐を解きました。すると、十五六人の小さい人が、みんな紐を解いて、それを結び合せました。そして、それを海の中へ下げました。

よく見ると、その人達はみんな女です。そして、一人も口を利く者はないのです。やがて、一人が手を上げますと、みんなが一齊にその紐をたぐり始めました。紐が悉くたぐり上げられると、その端には、太郎と姫の體がしつかり結びつけられてゐました。

色の白い小さな女達は、太郎と姫の體を、油の海でない、ほんとの海へ運んで来て、そこで油を洗ひ落しました。油がすつかり洗ひ落されると、女達はまた二人を魔の島の上へ運んで来ました。そして、一齊に、

「太郎さあ、海原姫よう。」



と、始めて聲を出して叫びました。
二人は呼ばれて、ハッと目を開きました。二人が女達を見て、驚いて立ち上がらうとしますと、「あたし達は決して恐ろしい者ではありません。あたし達は月の使女なのです。里の人達が茂右衛門の話を聞いて、お二人を助けたいと、神様へ願いをかけたのです。それに太郎さんも海原姫もお祈りになりましたから、神様達が可哀さうに思召して、月の神様に御相談を遊ばしまして、そしてあたし達をお遣しになつたのです。魔王をはじめ手下の者達も、もう悪い事の出来ないように、神様達が月の男神達をお遣しになつて、今に御征伐をなさいます筈です。」
と、かう申しました。
二人はやつと安心しました。二人は手を取り合つて喜びました。そして、神様達に厚くお禮を言



ひました。
丁度その時、急にあたりが眞白になつたかと思ふと、眞黒な魔の船の甲板に、眞白な人影が澤山に見えました。
すると、今まで歌つたり笑つたりして騒いでゐた魔者どもが、妙な叫び聲を出して、急に立ち上がりました。
劍を抜く者があります。弓を取る者があります。槍をしごく者があります。船の上は忽ち戦の場所となりました。
魔王が梟のやうに叫ぶと同時に、魔の手下どもは矢を放ちました。劍を抜いた者、槍を構へた者は、一齊に白い神達に襲ひかかりました。
今まで眞白だつたあたりは又墨を流したやうに暗くなりました。島にある人達は、神達が負けはしまいかと心配しました。



ないので。

丁度この時、島の蔭から、船が三艘姿を現しました。

魔王も、もう神の縛を受けてゐるので、島のやうな聲を出す事も出来ません。

やがて、その船が島へ着くと、乗り手は悉く島へ上がりました。

白い光に照らされたのを見ると、それは太郎の父や茂右衛門や太郎の家の家來達でした。そして、この人達が男神達の道案内をして、魔者の征伐に來たのだといふ事が分りました。

太郎と娘はおの／＼自分の父親に縋りました。人間の父の喜びやうは勿論の事です。魔者の父も改心の色が鮮にその顔に現れました。

人間の父と魔者の父とは涙を流して、手を握り合ひました。(完はり)

暗い世界がまた白くなりました。冥神達は白い矢を放ちます。魔の黒い矢と白い矢が飛び違ひました。黒い槍黒い刀と白い槍白い刀が斬り結びます。ですが、兩方とも一言も口は利かないのです。暗と白い光とは交る／＼あたりを包んだり照らしたりしました。

風もありません。浪もありません。空には雲もありません。

無言で魔者と男神とは戦ひ續けました。暫くすると、今度は一だんと強い白い光が、隈なくあたりを照らしました。

もう矢の飛ぶ音も聞こえません。刀の切り合ふ響も聞こえません。

やがて、黒い船から眞白な甲冑を着た男神達が、眞黒な影のやうな魔者どもに繩をかけて、島の方へ引いて來ました。魔者も神も一人も死んだ者は



蟻のお國

(長編童話)

長田秀雄

前號までの梗概 淳さんがある日お庭でお酒を飲んでゐますと、大槐安國といふ國の王様のお使が来て、金枝公主といふ美しいお姫様のお聲になつてくれといひましたので、早速行つてお舞さんになりました。ところがお隣の禮羅國の王子が金枝公主をお嫁さんにほしがつてゐましたが、望がとげられなかつたので、怒つて大槐安國へ攻めて來るといふ噂が立ちました。その後、金枝公主には瓊英公主といふお姫さんがお生れになつて、そのお姫様が二十歳になられた頃、また禮羅國の王子がお嫁さんにくれといつて來ましたが、淳さんは斷りました。すると金枝公主が御病氣で船江城といふ所で養生してゐましたが、時、不意に禮羅國の王子が攻めて來ました。幸ひ淳さんが援兵なつて早速かけつけて來てくれましたので、やうやく助かりました。一方禮羅國へは淳さんの命で周さんが攻めに行つてゐましたが、さんまんに取られて歸つて來ました。それがため周さんは牢籠へおさらばしました。

五

折角病氣がよくなつた金枝公主は、禮羅國の大軍が攻め、よせて來たので、大へん心配したため、また病氣が悪くなつてきました。

可哀さうに金枝公主は、もう糸のやうにやせ細つて、玉をちりばめた寢臺の上に寝た切りになつてしまつたのです。

淳さんは國中の名高い御醫者をすつかり招いて診て貰ひましたが、どの御醫者も黙つて、首を傾けてゐるばかりでした。私がつつと快くして御眼にかけますと云ふ人は一人もありませんでした。

瓊英公主は大切な大切なお母さんの御病氣が、段々頼み少なくなつてくるので、もう氣が氣ではありません。珠であんだ簾を垂れ込めた室の内で、夜の眼も寝ずに看病をしてゐらつしやいました。そして、時々、お母さんが睡つてゐらつしやる隙をねらつては、佛さまに

『どうぞ私の命をちゝめてお母さんの御病氣を直すやうにして下さいまし。』

と云つて、願をかけたのです。

親孝行な瓊英公主の願にもかゝはらず、お母さんの金枝公主の御病氣はますます悪い方に向つてきました。御醫者たちは口をそろへて、

『もう今夜はむづかしい御座います。』と申上げました。

淳さんも瓊英公主も皆金枝公主の枕元に集まりました。

誰一人、物を云ふ人もありません。たゞ、枕元に立てた燭臺の油の衰える音と、不規則な苦しさうな金枝公主の呼吸の響が、室の内一パイに廣がつてゐました。

見る影もなくやせてしまつた金枝公主は、その時、バツと眼を明けました。美くしい眼の色は、昔のとはり黒水晶のやうに澄んでゐました。

それを見ると、淳さんも瓊英公主も何とも云へない心持になつてつひ涙ぐんでしまひましたが、金枝公主は案外しつかりした聲で

『あなた。』と、淳さんに呼びかけました。そして、淳さんが眼に一



「バイ涙をためて、凝乎と上から覆ひかぶさるやうにして、自分を見てゐる顔を少時見つめてゐましたが、やがて金枝公主は、微笑に、につこり笑ひました。悲しい笑顔でした。」

「あなた私は、もう今度は助かるまいと思ひます。あなたや娘を残して一人先きに参りますのは、厭で厭で耐りませんが、もうかう運が定まつてしまつては仕方がありません。どうぞ一生不幸な私の事を忘れて下さいまし。」

これを聴くと、淳さんと瓊英公主は、どうしても耐へられなくなつて、思はず聲を上げて泣いてしまひました。金枝

公主は細々とした聲でまた續けました。

「あなた、もし私が亡くなりましたら、お願で御座いますから、あなたは此處を出て、もとの人間界の國に御歸りなす

若しさうに

「でも、あなたは此處にゐらつてははいけません。後生ですから、人間の國へ御歸りなすつて下さいまし



し。」と、金枝公主はまた云ひつゝけました。

淳さんは

「何故此國にゐるてはいけないのだい。」と、不審さうに厭返りました。

「あなた、有難う御座います。あなたのやさしい御心は何と申していいやら、私は、もうたゞ涙にむせぶばかりで御座います。さうおつしやつて下さるにつけても、私は死んでゆくのが残惜しくて耐りません。」

金枝公主の言はとだへてしまひましたが少時して、また

金枝公主は

「それには、深い深い譯があります。」と云つて、ため息をつきました。

そして

「本當の事を何時かはあなたに申上げなければならぬ時

が来るだろう。私はそればかり心配して居りました。でもまあ、私が生きてゐる内は、そんな心配はないと思つて一日一日申上げるのをのぼしてゐましたが、愈私の命も終りに近くなつたから、悲しいけれども申上げるのです。あなたは何も御知りなさいませんが、この國にも、澤山悪い人が居ります。あなたが目覺しい功績をお立てになるのを見て、心の内で大へんあなたを妬んでゐる人たちがです。私のお父さまやお母さまはあのとほりよいお方ですが、それでも、やつぱりあなたに對しては、いくらか障があります。何故かとならば、此處は蟻の國です。そしてあなたは人間です。私が生きて居ればあなたは王様のお婢さんですが、私が居なくなれば、あなたはお父さまにとつては何でもない人です。あなたのやうな知恵のある方が、お婢さんなら却つて安心ですけれども、赤の他人となれば、お父さまは何時自分たちが亡ほされるかも知れないと云ふ事を心配なさるのです。ですから、私の亡なつた後、あなたは此處にゐらつしやれば、きつとよくない事が起ります。お父さまの願ひに願ひ人たちの縁が加はれば、あなたの御身の上は

ひになりましたが、いくら止めてもどうしても淳さんが思止まらないので、仕方なく辭職をおゆるしになりました。そして、淳さんが人間の國に歸るやうに取計らつておやりになりました。

淳さんは人民たちに別れを告げて、長らく住んだ南阿郡の都を立出でました。淳さんを父母のやうに慕つてゐた人民たちは、その日は皆仕事を休んで郡の境まで、淳さんを送りました。淳さんの馬車が段々遠く小さくなつて行くのを見て、老人も若者も女も小供も皆聲を上げて泣きました。

南阿郡の主だつた人民たちは、その見送りの歸りに相談して、郡の都の真中に、淳さんの生祠を立てました。そして、その傍に一丈五尺に餘る石碑を立て、文章の上手な學者に頼んで、その石碑に淳さんが二十年間善い政治を行つた記念として、立派な文章を刻んで貰ひました。

淳さんは住馴れた南阿郡をはなれて、瓊英公主と二人大槐安國の都に立歸りました。そして、久坂に國王陛下御夫婦にお目通りを致しました。瓊英公主の顔を見た國王陛下御夫婦は金枝公主に生寫しなので、また亡なつた娘の事を

危ない事になります。後生ですから人間の國にお歸りなすつて下さいまし。」

金枝公主はかう云つて、眠るやうに呼吸が絶えてしまひました。

後に残つた淳さんと瓊英公主の歎きは眼も當てられないやうです。

けれども、その儘にして置く譯にも行きませんから、淳さんは泣く泣くお葬式の用意をしました。

泣女を二十人雇つて、お葬式の御列の先につけて、悲しい音楽を奏しながら、靜かに金枝公主の亡屍をお寺に送りました。淳さんは幾萬となく路の兩側に立つて、金枝公主の亡屍を見送つてゐる人たちを見ると、二十年前の婚禮の夜の事を思出しました。そして、馬車の中で瓊英公主を抱きしめて泣きました。

金枝公主の遺言もあるので、淳さんはお葬式がすむと、早速國王陛下に南阿郡の太守をよさして頂くやうに御願ひしました。可愛い娘を亡なした歎のまだ消えない内に、淳さんが突然辭職を申出たので、國王陛下は吃驚しておしま

思出して、大へん驚かれました。

淳さんは二十年の間に國王陛下御夫婦の髪がすつかり白くなつたのを見て、我知らず涙ぐんでしまひました。

久坂に淳さんが歸つて來たので、大槐安國の都では大さう歓迎されましたが、金枝公主の臨終の言を思ふと、淳さんは、どうしても長くそこに止まつてゐる気がしないのです。そこで淳さんは國王陛下に瓊英公主をお頼みして、御殿中の人々に別れを告げて、人間の國へと旅立ちました。

お母さんには死別れ、今またお父さんに別れる瓊英公主の心の中はどんなでしたらう。淳さんは大槐安國に來る時に乗せられた馬車にまた乗りました。そして家來たちに送られて、遠く遠く都を離れました。

淳さんの馬車は、また例の穴の處に來ました。ひよいと周囲が眞暗になつたと思ふと、馬車はガタガタとゆれて、忽ち明るい地上に出ました。氣がついてよくみると、そこは忘れる事の出來ない汚らしい我家の庭先でした。相かはらず槐の樹が、こんもりと繁つて、初夏の夕日が熱く明るく射してゐました。槐の枝には目のさめるやうな若葉が、そ



よそよと風に吹かれて動いて
 ました。その枝の動くにつ
 れてもう大分西に傾いた日の
 光が、乾いた地面の上に映し
 た黒い影をチラ／＼動かして
 るます。

馬車が止まりました。何の氣
 もなく淳さんが庭先へ下りる
 と、ついて来た家来たちは黙
 つて、馬の轡を取つて急いで
 穴の方へと立去りました。

淳さんは吃驚して、
 「宮内官、何處へ、」と大きな
 聲で叫びました。

淳さんは自分の聲に驚いて
 目がさめました。よくみる
 と、自分はお酒に酔つて、槐
 の樹の深い日蔭に寝てしまつ

てゐたのです。淳さんの襟には、グワッショリ汗が出てゐま
 した。

「してみると、今のはすっかり夢だつたのか。」と、呆やり
 して、淳さんはつぶやきました。そこに、主人の目がさめ
 たのを見て、雁つてある書生さんが、熱いお茶を持って來
 ました。それを一口飲むと、やうやく淳さんは心持がハッ
 キリしてきました。

淳さんは、不思議な心持がして仕様がなないので、何
 だか夢に見た大槐安國の二十年の間の事が、滿更夢だとは
 思へないので、よくみると、自分はまだ若い達者な身體
 ですけども、夢の中で、奥さんを貰つて娘を生んだ自分
 の方が、本當で、今の自分が、夢のやうな氣持がするので
 す。

すつかり淳さんは考へこんでしまひました。それから淳
 さんはお父さんにも會ひ、自分の部屋にも行つてみました
 が、すべて箱と少しも變つてはゐませんでした。が、併し
 淳さんの心持は、もうすつかり變つてしまつて以前のやう
 に、自分が世の中からも用ゐられないのを不平に思ふ事もな

くなり、また、人の悪口を云ふ氣も起らないやうになつて
 しまひました。

そればかりではありません。あれ程好きだつたお酒もバ
 ッタリ止めてしまつたのです。

淳さんの變り方を不思議がつてゐた酒飲友だちは、その内
 に段々やつて來なくなつてしまひました。

淳さんは毎日一度きつと庭に出て槐の樹の蔭に坐るので
 す。
 そして、金枝公主や、瓊英公主の事をうつとりと考へて
 るのでした。

ある日、
 やつぱり平生のやうに淳さんは槐の樹の下に坐つてゐま
 した。段々夏が深くなつてきたので、日の光が鮮に射
 してゐました。

ふとみると、蟻の長い行列が、自分の方へやつて來ま
 す。淳さんは妙な心持になりました。

そして
 「あゝ、俺もあの行列の内に入つてゐたのだな。」と何時か

の事を考へて凝乎と見てゐました。

蟻の行列は淳さんの足をよけて、槐の樹の太い根を乗越えました。そこには淳さんの忘れの事の出来ない小さな穴があるのです。みるみる内に、蟻はその穴へ入つて行きました。

淳さんはどうかして穴の中の蟻のお顔を見たいと思ひま



に動かしてお城を掘へ、その中に蟻窟と云つて窟へつくせない位蟻が居ました。

よくみると、その蟻の中に二疋、白い羽が生えて赤い冠を被つたやうなのが居ました。

「これが國王陛下御夫婦だな。」と淳さんはなつかしく思ひました。

書生さんはすすん掘つて行きました。この蟻のお城から南に枝道が長くつゞいて、その果に、また一つ小さな蟻塚がありました。

「これが南阿郡かな。」と淳さんはつぶやいて少時その蟻塚を見てゐました。

蟻は何も知らないやうにうようよと動いてゐました。その蟻塚から、四五間はなれて、もう庭のはづれの處に一株の紫壇が生えてゐました。

「成程、檀羅國がこれだな。」と、淳さんは、感心してつぶやいたのです。

何時の間にか、空が曇つてきたと思ふ内に、もうあたりは眞暗になつて、雨がさあさあ降つてきました。淳さんと

した。

そこで罪な事だとは思ひましたが、書生さんを呼んで来て、その槐の根を掘つて貰ひました。

四尺ばかりも掘つて行くと、その下に大きな蟻塚がありました。穴の廣さは一寸位ありました。そして土をうまい工

書生さんとは槐の下に窟をよけて、晴れるのを待つてゐました。

夏の夕立です。

みるみる内に忘れたやうに雲がなくなつて、またカンカン日が照つてきました。

掘り返した地面をみると、何時かしら、蟻塚は他處に移つてしまつて、もう一疋も蟻の姿は見えませんでした。

淳さんはそれから大へん考深い人になりました。そして、毎日勉強ばかりしてゐました。

その内に、淳さんの身持がすっかり直つたと云ふ事が、お上に聞こえたので早速天子様からお招きの手紙が來ました。

淳さんは都に上つて天子様の御眼通りをしました。淳さんは天子様に、自分の夢のお話をいたしました。

天子様は大きく感心なさいました。そして淳さんに大臣の位をお授けになりました。淳さんはそれから一生懸命に國の政治をつとめました。

そして大さう幸福に一生を送りました。(をばり)



幼年詩 若山牧水選

柿の木(賞)

兵庫縣細川第一小學校尋六 服部準治

雨のふつたあくる日
柿の木のさきに新芽が出たよ
柿がなつたら誰にやろ
坊やにやろか

お天と様にあげよか。
野、お天と様にあげてから坊やにお呉れ
坊やがたべたらそのたれをまた植ゑ
ておく。(牧水)

栗鼠(賞)

東京市牛込區矢來町 藤田圭雄

めだまの
くりくり
くりねすみ

町の
煙突に

おつこつて
まつくろ
くろく
くろねすみ。

野、幼い人の作にしては少しうますぎる
位にうまい、黒い鼠にしやぼんをつ
けてよくよく洗つてちよと見たらま
つちろくくの白れすみ。(牧水)

みず

東京市牛込區河田町 佐藤信雄

ちいぢいぢい
みずが鳴く。
どこで鳴くのか
ちいぢいぢい
鉢の下か

童謠

野口雨情選

罌粟人形

東京府豊多摩郡杉並村 長野桂子

お庭へ投げた
罌粟人形
しやくとり蟲が
尺とつた

幾尺あつたか
聞いて見よ。

雨の夜道

東京市麹町六の七 長谷川良夫

雨が降つても
日は暮れる

狐が提灯
照けてゐた

盆のやうなお月さん
わたしの兄さん知らない
シベリヤのあつち
露西亞の港

お月さん
知らない。

丁字風呂

東京市牛込區河田町 佐藤勝熊

白い鬼

街の丁字風呂へ
遊びに行つた

桐の實がなつた。
桐の實がなつた。

春の日は長いな。
春の日は長いな。

雀さん

東京市小石川區小日向臺町一の十 小野白桐

チユチユチユ雀さん
風が吹いてもチユチユチユ

町までここから
三里ある

狐が二匹で
話してた。

笹舟小舟

群馬縣勢多郡粕川村月田 青柳花明

笹舟小舟
たらいにうかしよ

たらいの海は
日和だ風だ

日和だ風だ
日和だ風だ

笹舟小舟
船頭は蟻だ

着いたら岸へ
おりてもよいぞ。

月

茨城縣多賀郡日立村宮田 黒瀬隆藏

盆が暗つてもチユチユチユ
追はれて逃けてもチユチユチユ

朝の玄關

富山縣婦負郡八尾 中島映二郎

浮いた、浮いた。
帯の波に

大きな靴
小さなお下駄

赤い緒の草履
兄さんの

あんよは大きいな。

ふくろう

宇都宮市旭町二丁目 古口和歌

夜つびて鳥がないてゐる
高い棟のてつべんで

お月様がソツトのぞいたら
大きな目玉で

にらまれた。

葉のかけか。

朝顔

雨やこんく降つてゐる

朝顔 朝顔

咲いてくれ

明日の朝には

赤いのも黄いのも

みんな一所に。

評、二つともたいへんに佳い、出来たばかりのシユークリィムの様にやほらかくて美しい。(牧水)

五月雨

滋賀縣古保利小學校高二

木俣修 二

緑の雨が

毎日毎日

降ります。

飲事場へ

なめくぢが

はひ上ります。

紙片

強い風の日

紙片が一つ

つばさをひろけて

えらい勢で

高い空を飛んでゐる

木の枝にとまつて

又すぐに飛んで行く。

評、なめくぢを眺め風に飛んでる紙片を見上げて躍らせた心のすがたがこれら短い言葉の中によく出てゐます。(牧水)

星

横浜市壽町三ノ一四六

千代崎清藏

大きい星や

小さい星が

皆なで仲よく

あつちでビカ／＼

こつちでビカ／＼

方々でビカ／＼。

評、空いっぱいびか／＼してゐる様だ。(牧水)

百合

東京小石川區同心町一

久木すま子

咲いた咲いた

綺麗に咲いた

お庭の百合は

皆さん御覽

揃つて咲いた。

雨上り

京都市古川町仁王門西入

金澤好良

除いた、除いた

あの雲、除いた

見えた、見えた

五重の塔が見えた

飛んだ、飛んだ

鳥が一羽飛んだ

西へ向いて飛んだ。

おぢさん

京都市牛込區白銀町

山本雄



泥棒 (貧)

京都市牛込區河田町

佐藤信雄

「六郎、六郎、おい何故へんじしない。

六郎、六郎、ほら死にそうだ。きぜつ

するよ。ほら水だ／＼」とお母様が叫

んでらっしゃる。然しだれもへんじしな

い。あかりがビカンと光つて居る。夜

の十二時頃だ。

僕はなにかと思つて起きようとした

するとお母様かとんで来て、僕をおさ

へつけて、

「何んでもないんですよ。い、から寝

てらっしゃい」と云はれた。仕方なしに

少し寝てようとする。

「六郎、七郎、おい返事しないか。勝

(兄の名)上へ行つてお父様をよんで

草花賣りの

おぢいさん、

いつもの車を

引いて来た、

蝶々が後から

押して来た。

虹

東京四谷區舟町

都築益世

虹が出た。虹が出た。

七色小橋に灯がついた。

上を向いて渡れ

虹の小橋渡れ。

▼掲載外優秀作品

△夏 静岡 賤機民秀△木の葉 松本

大井廣△赤蛇目 佐賀 有馬淳△親無し

雄 大阪 關口安一△やあちやん 愛知

藤原直一△アトホホ 廣島 村田午郎△

古代 東京 水野壽雄△芝生の夢 名古屋

鳥木本一△東京 坂町正一

「死にそうだ」とか「青い」とか皆が

わい／＼云つてる。

僕は床の中に居て何んだかさつぱり

わからない。だれが死にそうなんだら

う。第一六郎とか七郎とか云ふ人は家

に居やしない。すこしこわくなつて来

た。

するとガチャ／＼音がする。

ドン／＼／＼と誰れか門の戸を叩く

音がする。僕はなんだか恐くなつてき

てふとんにふかくもぐりこんだ。

しばらくして床から首だして見ると

誰れかが来てひそ／＼話して居る。大

家さんが来たのだ。時々、

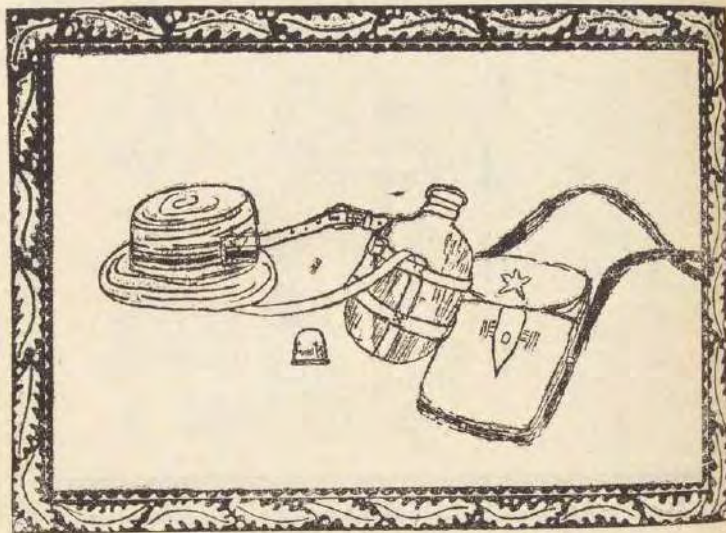
「泥棒」「氣味がわるい」とか云ふ言葉

がきこえる。何んだかさつぱりわから

ない。

そのうちに大家さんも歸つて、お母

あさんも灯をけして寝てしまった。僕



一恭田建 二尋校學小柳植市都京「具行旅」畫由自

つて、此の間からあいてゐるせきをおさしになりました。さうして、「添田さん」とおよびになりましたから、添田君が、「はい」と答へますと、「この方は松本さんといふ人で今度遠い所から来て今日から此級へは入る方です。」とおつしやいました。又松本君には、「これは級長の添田さんです。わからないことは此の方におききなさい。」とおつしやいました。私ども二人は、丁ねいにおじぎをしました。松本君は色が黒くてまるくくと太つてゐます氣がさつぱりしてゐて、二三日たつと前からの友だちのやうになりました。或日僕が運動ばへ出て見ると、松本君が泣いてゐました。聞けば級の者が二三人でいじめたさうです。僕は、「君しつかりしたまへ、日本の男は泣くものではない」といつて、かほをつけてやりました。松本君は學問も出来るし、うんどうもじやうづです、ほくは自分よりえらい友だちを、大ぜいでいじめるのは男らしくないと思ひます。



(歳六) 夫英野長 寺圓高村並杉下府京東 (賞)「瓶花」畫由自

もわからないまゝでねた。

明る朝、昨晚のことをきいて見ると、きのう泥棒が入りかけたのだ。いつとう初めに、兄さんが屋根をだれかがみしくあるくの目がさめて、お母様を呼びおこしたさうだ。

それからわざと僕だけ恐がるといけないと云ふんでおこさず、皆んなでわざとだれかが死にそうになつたつもりで、さわいで泥棒を逃がすと、男の名前を呼んで、男が澤山ゐると知らせようとした。しかしだれもこわがつて返じをしなかつたのだ。

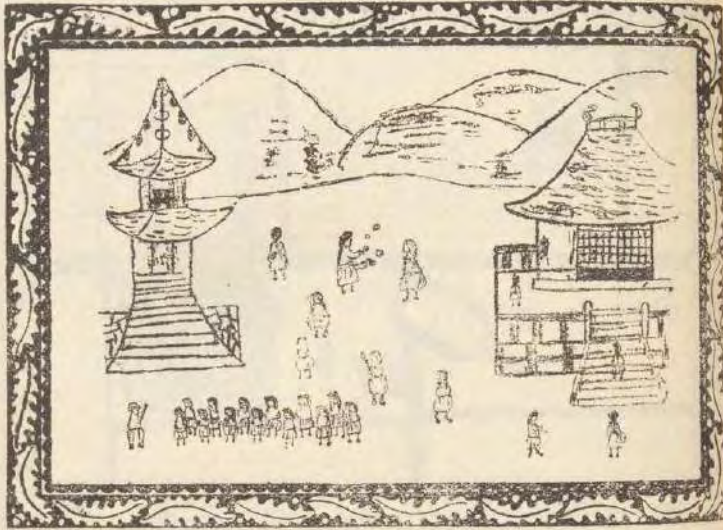
それから大家さんが起て来たので、泥棒が逃げてしまつたのだと、あとで聞いて僕は初めてきのうのさわきがわかつた。それからみんなで戸じまりをよくした。

松本君

東京府大井第一小學校三年

中 岡 康 男

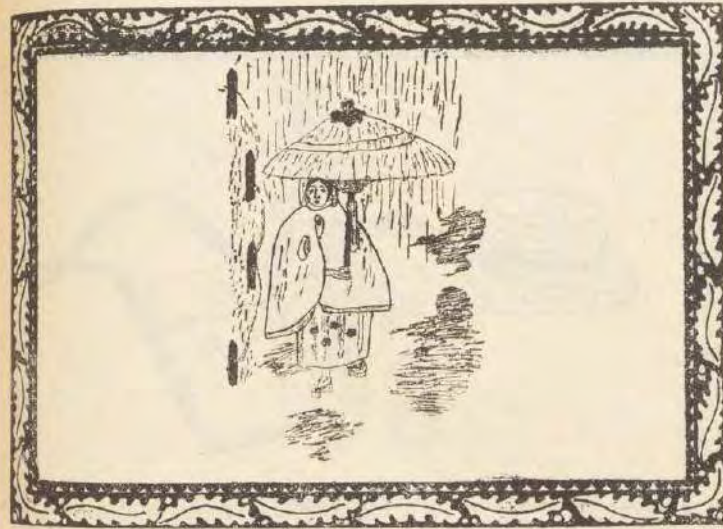
六月一日の朝、僕がたうばんで机の上をふいてゐると先生が知らない生徒を一人連れておいでになりました。ここがあなたの教室です。せきはあれにしますかとい



子ヲ田鹽 五尋校學小鶴舞中府都京 「寺隆圓」 畫由自

「面白いなあ、桑摘は、石田さん一べん役場へ持つて行かういな。」と言ひながら、二人は役場まで走つた。あざきようさん桑があること——。」と石田さんが思はず叫んだ。さあ早ういくやなあ早う行つて摘まんと負けるやでおかしい人この人は」とぶつ／＼私は怒りながら又桑畑へ歸つて摘んだ。あちらの方に一の瀬さんや吉田さんの聲が聞える。「私等いやはな、男生のねき(そば)に居るのは大きらひや。」と石田さんは桑籠を引きつりながら女生の澤山るる方へ行つた。私も仕方がないからついて行つて桑を取り初めた。あらか川口さん七組の籠へ入れとんなある。」と後ろから松山さんの聲がした。私は一寸腹か立つたので、「へい……御免なされ。」と言ひながらあちらへ行つた。

私は一人桑を摘んでると大分澤山になつたので「石田さん又持つて行かうか」と言ふと「おいなあ」と石田



枝くき下松 六尋校學小立公三第山笠鮮朝 「日ノ雨」 畫由自

「御飯がすんだら蠅を追つてちやうだい。」と、お母さんがおつしやる。「又か」と思つたが仕方がない。お膳のわきのうちはお膳とつてバタバタ／＼とあほぐ。お母さんの髪がゆれる。おさかなにたかつてゐた蠅が、一時にバツと飛び上つた。お父さんは「ウム涼しい。」と、ひたひの汗をふいてゐられる。少し手をゆるめると又よつてくる。「にくらしい奴。」とバタ／＼と両手であほぐ。小さい妹の髪が、大波のやうにゆれる。弟は片手で頭をなげまはしてゐる。「どうしたの。」ときくと、「蠅が来て仕方がない。」と、自由にならない右手を、うらめしさうにながめてはおさじでお汁をすくつてゐる。「じやあほいで上げようと、又バタ／＼とあほぐ。よい氣持だ僕が御飯がすむまであほいでくれるといふがあ。」と、ひとり言のやうにいふ。

しばらくすると弟は、「ちさ／＼とママ。」といつて立つ。ついでお母さんもおすまになつた。有難う。もうハ、よ。」「やれ／＼。」と思はず口から出たこのまゝの、や

桑摘み

福井縣大飯郡高濱小學校高一

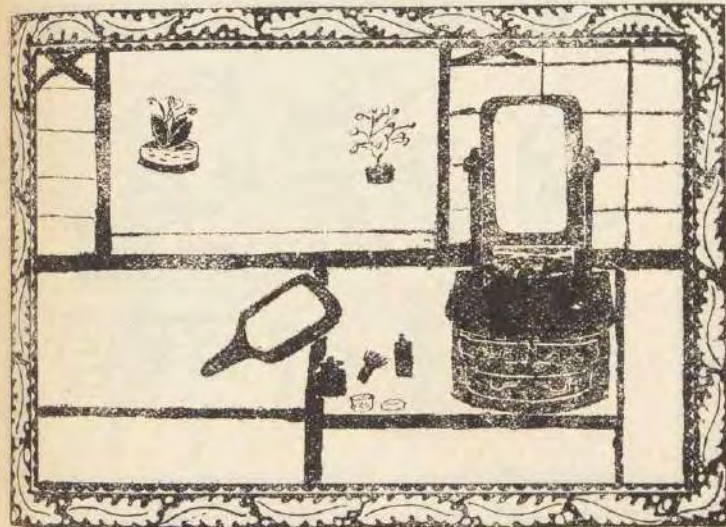
川口ハツ



枝静田和 六尋校學小立公三第山登鮮朝 (賞) 「門校」 畫由自

十一ぐらひの男の子が、二三人通りかゝりました。きたない着物を着て、いたづらそうな子供でしたから、私は後をふりかへつて見ると、池のふちをとんでゐた一匹のかへるを見つけて、一人の子供のいふのには、「こんな所に来たないかへるがるわい。」といつて、そのかへるの足を二本もつて、足を二つにさきました。そのかへるは、茶と白のまじつたしまがへるです。そのかへるは白い目をむいてしにかけました。その男の子は「やー、きたな。」といひながら池の中へほりこみました。そうすると、池の水が、「ちやぶん」といつたかと思ふと、又そこへらにゐるかへるが、「ちやぶん」と音をさせながら、池の中へとびこみました。一人の子供も、「わい(わたくし)もあいの(あゝいふ風)のかへるをとつたらよかつたなあ、あゝこゝにゐるよ。」と言つて、又一匹青がへるの小さいのをとつてきました。こんどはかへるを下へおいて、とほうとする所をふみました。すると一本足がちぎれてちんばをひきながら、「ひよこ〜、」とんでいきました。その男の子は又走つていつてと〜う〜そのかへるをふみつぶしてしまひました。二人は面白さうに話し話し行きました。

口佳作 △蛙つり 激賞、木俣修二(以下通信欄)



子佐美橋高 三尋校學小海東川品南外市京東 「み々か」 畫由自

さんが言つた。二人が籠を持つて行かうとすると山口さんが来て「私に持つて行かしてんかいなあ」と言つた。けれど石田さんは「をかしい人此のおみちちゃん……人が持つとるもんを自分行かへでもよいのに。」と怒つた。山口さんは「あはい自分二へんも行つとつて一寸も持つて行かしておくれへんがなあ……だんない私桑拾ひもつて行くはな。」「おいな……お出」と私は言つた。桑を役場にあけておいて又桑畑へ走つて歸つたら「もうみんなとれたはなあ……。」と言ふ聲が聞えた。先生は「男生だけあつちの方へ行つて高等二年の手傳てやれ」と言はれた。

暫くすると男生が「もうへいといやあ」といつて歸つて来た。「ほんまかな。あと女生の大勢が聲を揃へて言つた。すると先生が來られて「御苦勞さん皆んな足洗つておくれ」と言はれた。みんなは汗をふき〜井戸端へ走つた。

大阪府天王寺師範學校附屬小學校尋四

石崎さき子

日曜日のひる私が池のふちであそんでゐるますと、十か

「金の船」一週年記念 アンデルセン 號豫告

来月は「金の船」の創刊一週年です。

これを機会に「金の船」の面目を一新して、いよ／＼立派な、面白い雑誌にしたいと思ひ、十月號は「一週年記念アンデルセン號」として、世界一の童話作者アンデルセンの童話ばかりを集めて出す事にいたしました。

アンデルセンといへば、童話を讀む方は誰でもその名を知つてゐる位偉い人で、實に面白いお話を澤山に書きました。しかし、「金の船」のアンデルセン號は、この人の作られたお話の中で、それ程世間に知られずにある極く面白いものばかりを集めました。綺麗な繪を澤山に入れて、本當に立派な雑誌として皆さんにお目にかける積りです。

その主な讀物と作者の顔ぶれば、大體次の通りです。

- ▼ 旅の道づれ (長篇) 楠山正雄
- ▼ パンを踏む娘 (長篇) 吉田絃二郎
- ▼ 魚 (長篇) 西條八十
- ▼ はだかの王様 (童話劇) 長田秀雄
- ▼ 煙突掃除と女羊飼 (長篇) 小山内薫

- ▼ バタ屋の妖精さん (短篇) 田中純
 - ▼ 高飛競争 (繪ばなし) 岡本歸一
 - ▼ 獨樂と毬 (繪ばなし) 同
 - ▼ ハンの馬鹿 (短篇) 橘逸雄
 - ▼ 甲蟲 (短篇) 齋藤佐次郎
 - ▼ 沼の王様の娘 (長篇) 吉田六郎
- (尚、この外に短いお話が三つ四つ加はるつもりです。但し、作の題は作者の都合により、多少變るかも知れません。)

「金の船」主 催 童 謡 音 樂 會

創刊一週年記念として「アンデルセン」號を出してから續いて「金の船」主催童謡演奏會を開く豫定にいたして居ります。演奏曲目は、創刊このかた「金の船」に載りました本居長世先生、中山晋平先生、北村季晴先生の作曲を主としたいづれも優れたものばかりです。當日は本居先生、中山先生はじめ有名な音楽家たちが出演されますし、又、西條八十先生の新作童謡も、本社の野口雨情先生の未發表民謡も演奏される筈です。くはしくは何れ御報告します。誌友の方には記念のためいろいろの特典を設けるつもりです。



(通信)

童謡の選後に

野口雨情

童謡の作家は、静さの中の美しさを見出し、てゆくことが大切で、静さの中の美しさほど本當の美しさはないのであります。静さの中の美しさが判るようにならないうちは、童謡作家とは申されません。いくら理窟でない無邪氣なことなうたつても、静さの中の美しさがなくては、藝術としての童謡にはなりません。皆さんのうちには、童謡と唱歌を同じやうに考へてゐる方があつても知れませんが、それは大變な間違でありませぬ。童謡と唱歌とは、随分違つて居ります。童謡はどこと、までも藝術的にゆかればいけません、唱歌にはそれがありません。一つなり二つなりの事情をうたひよくさへ條件が整つてゐれば、唱歌の目的は足りるのであります。

綴方選評

選者

今月はいゝものが大變に澤山で、是非出したいと思つても、のせ切れない程でした。佳作として挙げたもの、中にも随分いゝものがありました。

さて、雑誌に出た綴方に就て思ひついた事を書いて見ますと、佐藤信雄さんの「泥棒」は散文詩のやうに生き／＼としてゐて、實にいい書き方でした。最初の方で「あかりが、ぴかんと光つてゐた、夜の十二時だ」といふあたりは、一寸お定りの文句で、いゝと思ひませんが、泥棒が入らうとするので、家の人達が騒ぎ立てるあたりは、實に巧いものでした。この位いつもきび／＼と書けたら立派なものです。

中岡康男さんの「松本君は、どこが特にすぐれてゐるといふ程の處はありませんでしたが無駄がなく、書くだけの事は十分に書いてあつて、すなほな作でした。かういふ書き方には危険がなく、と思ひます。

「鱈」を書いた鳥田須美子さんは、本當に文章が造者で、簡潔な書き方をしますね。一例を挙げると、「お膳のわきのうちはあふぐと

童謡は、唱歌のやうなガサツなものでは決してありません。

今回集りました童謡中では、長野桂子さんの作が一番注意をひきました。小さな芥子人形を尺とり蟲が尺をはかつてゐる所に新しい発見と可愛らしいあはれさがありました。これが前に述べました静さの中の美しさのれちであります。

自由畫について

山本鼎

△今月はずぶぶん澤山集りました。でも、うすばんやりと描けた畫や、水繪の具や色鉛筆で描いた畫が、相かはらずあるので、私は困りました。

そんな畫を悪い畫だといふのではありませぬ。三月號の版の話でくはしくお話ししたやうに、うすい畫や、色で描いてある畫は雑誌へ出しては駄目なものです。版にして印刷すると畫が見えなくなつてしまふのです。で、それが私の好きな畫であつても雑誌へ出せないから困るのです。

△毎號「金の船」のをはりのページに「子供」の自由畫を載せるといふ文が出て居ますね、あれをよく読むでから居つて下さい。

應募童謡選評

選者

お母さんの髪がゆれて、おまかなになつてゐる能が一時にワツと飛び上る。といった様な調子で、少し大人びてゐると思ふ位、見かたも變つてゐるし、表し方も造者なものです。しかし、鳥田さん、あなた、綴方には大變すぐれた才がありますが、その代り少し注意なさらないと、悪逆者になりますから、お氣をつけなさい。

集つた主な童謡は次の諸作です。△天の外で 野島増夫君△金魚とあめんぼう 齊藤素果君△雀と燕 牧野傳君△春風の姫様 建石建之助君△お羅漢の話 吉田蓑哉君△源助爺さん 小野流君△留守番する日 大内淳君△笛の音 佐藤勝熊君△男の様な 福家内記君△夏のある日 竹田鉦引君△不思議な穴 菅原至誠君△狐が火をとす話 伊藤一雄君△窓深婆さん 熊澤みどり君△夢物語 藤本結風

齊藤君の「金魚とあめんぼう」が一等よく出来てゐました。美しい池の中に住んで何不足なかるべき金魚が、何かにつけて不平ばかり言つてもつといふ所へ行つて見たいものだ

△水鳥修三君の鉛筆畫はしつかりして居ます。今度は寫生畫を送つて下さい。千野霜作君も寫生畫を送つて下さい。

△田中しづ子さん、加來かつれさん、林ちよ子さん、小野利子さんたちの畫は面白い良畫でしたが、彩で描いてあるので雑誌へ出せませんでした。

△森本とし子さん、重野秀雄君、飯塚きみえさん、柏みよしさん、和田静枝さん、藤原登士さん、小瀧時子さん、奈良千代子さん、の畫も良い畫でした。でも今度はもつと良い畫が他にあつたので雑誌へ出ませんでした。

△本田貞介君、畫をまねしないで、なんでも實物を寫生して御覽なさい。

△豊間根篤行さん、小島吉子さんの寫生畫もなかなか良い畫でした。どん／＼寫生をおしなさい。

繪日記のこと

△山本鼎先生の發案で、こんど諸君に暑中休暇の繪日記をつくることになりました。繪日記は何日からでもいいのです。諸君のどくいの自由畫でお描きなさい。くはしい事は、おしまひにありますからごらん下さい。

と思ひ／＼考へてゐるうちに、ついあめんぼうに誘はれて池の外へ出て見ますと案に相違してそこは眞暗な濁々した水の中、これまで描いていた勝手な空想はすつかり裏切られて途方にくれてしまつたといふのです。これは誰しもが日常経験すること、別に新しい味のあるといふほどのものでもありませんが、齊藤君はこのありふれた、寧ろ月並すぎる程平凡な事柄を描いて美しい時にしてゐます。どうかするとかういつたことがらば概念的なもの、教訓的なものに墮ち易いものですが、そんな意味や臭味を出さないですつかりしたものにしてみるところなどは巧いものです。

次に、佐藤君の「笛の音」は創作ではなからうと思ひますが、氏自身のものとしてあれだけ生かされた點は充分認められます。だが原作が有名なものだけ、それだけ努力の効果な著しく弱めたらうと思ひます。菅原君の「不思議な穴」はよくとつた無難な作ですが、たゞ型が古いが嫌です。熊澤君の「窓深婆さん」もやっぱり古いものでした。ありふれた材料をとり扱ふにしても、なるだけ新しい形式で表現するやうに試みられむことを望みます。(編輯の都合で以下次號に譲ります。)

◆金の船の消息◆

▼泉鏡花先生や、馬場孤蝶先生の童話をこの九月號に出すはすになつてなりましたが、編輯の都合で十一月號になりましたことを讀者諸君にお詫びいたします。

▼三木露風先生 北海道トリスト修道院に田園生活をして居られる三木先生が今後本誌のために毎號童話を寄稿されることになりました。

▼藤澤衛彦先生 日本傳説研究の大家として有名な同先生は特に本誌のために面白い諸國の傳説や傳説による不思議なお話を寄稿されることになりました。

▼迷ひ子の家鴨 (鈴木管太郎先生著)
「狸の高軒や」大糸小糸でおなじみの鈴木先生の童話集であります。この中には、迷ひ子の家鴨や、狸の高軒やその他みんなで十五篇の面白い童話があります。それに初山遊先生の繪もたいそうきれいに出来てあります。夏休みでこたい、つづの坊ちゃん藤ちゃんたちにぜひ読んで下さい。たいと思ひます。きつと書きも忘れてしまひますし、おいたしなくなくませう(定價一圓九十錢、東京牛込區神樂町、文庫堂發行)

- ▼幼年詩佳作 △つん／＼ 兵庫 白井忠二
△ひどい風 朝鮮 二階堂ヨシエ夕立朝
鮮 佐藤義信△ふくろう 神奈川 澤田文治
△幾屋 京都 細川弘三
▼綴方佳作 △學校の前で 大阪 石上メエ
子△かけす 東京 平橋俊郎△お母さんの死
朝鮮 武尾健藏△おす人 大阪 松岡正江△
お交様の顔のほくら 大阪 吉村操△舟遊び
福井 魚住隆二△船 福井 胡間六郎△貞ち
やん 福井 伊藤作次郎
- ▼「金の船」誌友(つゞき) △仙臺 鈴木
幸四郎君△和歌山 木村唯夫君△福井 鳴戸
正直君△滋賀 吉飯英太郎君△東京 岡島正
人君△千葉 野口太郎君△福島 佐藤貞吉君
△埼玉 田中よし君△和歌山 山本博章君△
鹿兒島 廣瀬政行君△愛知 幸村太郎君△岩
手 龍兒せつ君△鹿兒島 結佐純義君△臺灣
林學達君△信州 松澤俊雄君△三重 土井敦
子君△長野 桐山岩雄君△朝鮮 石谷みれ子
君△大分 池部計之助君△福岡 藤井松市君
△朝鮮 杉山ミズ子君△徳島 坂東豊子君△
大阪 南川英彦君△茨城 大車章君△北海道
遠見隆三君△東京 幸田輝子君△北海道 森
崎みさほ君△佐賀 幸田口早苗君△鳥取 佐
藤豊十君△千葉 松枝修君(以下次巻)

▲童話童話募集

吾々がかくれたる童話、童話作家を
紹介したいが爲めに、毎月童話童話
を募集いたします。題材は勿論作家
の自由ですが、内容形式は共に従来
の型を破つた、眞に藝術的な作品を
求めます。

原稿の枚数は、童話の場合には十行
廿字詰原稿紙八枚以内、童話の場合
は廿五行以内。優秀な作品は誌上に
掲載し、且相當稿料を差上げます。
選者は、童話に野口雨情先生、童話
は當分の内編輯部でいたします。

▲「金の船」誌友募集
「金の船」の誌友を募集いたします。
誌友になれば、いろ／＼の便宜や特
典がございます。誌友規則を知りた
い方は編輯所宛にお申込下さい。
すぐお知らせします。

東京東府下田三五百五十一番地
「金の船」編輯所

□少年少女の創作募集

自由畫 山本 鼎先生選
自由畫は、お手本や雑誌の畫なんか見ずに、花なり、景色なり、動物なり、お
母さんのお顔なり、なんでも好きなものを、かつてに描いて下さい。

幼年詩 若山 牧水先生選
幼年詩は、山なり森なり花なり、何でも見たり感じたりしたことを、みなさん
の好きなやうに詩にして下さい。

綴方 編輯部選
綴方は、みなさんが見たこと、思ったことな、そのまゝふだんつかつてゐる言
葉で書いて下さい。

暑中休暇の繪日記を募る

山本 鼎

▲學校のお休み中、繪日記をつけて御覧なさい。
▲繪日記とは、其日々に、見た事、感じた事、考へた事、聞いた
事——なんでもいゝから畫にかき度いものを描くのです。むろん
其わきへ文章で日記をつけていゝのです。
▲繪日記は、半紙を四つ折りにして綴じたのでも、二つ折りにして綴
じたのでもよろしい。なるべく墨で描いて御覧なさい。
▲出来たらどれでもよいですから、好きな一冊を送つて下さい。日
記ですからお戻しすることにします。
▲第一回締切は九月五日。
▲良い繪日記は雑誌へ出し、賞品を差上げます。

定價一冊三十錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)九十錢
半年分六冊(送料共)壹圓十錢
壹ケ年分十冊(送料共)壹圓四十五錢
換替口座東京〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいた
します

▽御注文は必ず前金で御拂込下さい
▽送料は小爲替でも切手代用でも宜敷
う御座います
▽切手代用は(壹錢切手)一割増に願ひ
ます
▽御注文の場合は第何巻第何號よりと
云ふことをはっきり書いて下さい
▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きく
ださい

大正九年八月四日印刷納本(毎月一回)
大正九年九月一日發行(一日發行)

東京東府下田三五百五十一番地
編輯人 齊藤佐次郎
發行所 東京東府下田三五百五十一番地
東京小石川大町百八番地
東京小石川大町百八番地
印刷所 株式會社博文館印刷所
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地

發行所 キンノツノ社

大正八年十月十六日 大正九年八月四日印 刷 冊 本
第三編 郵便物 第三 大正九年九月一日發行(毎月一回一日發行)

東京 キンノツノ社 發行

繪雜誌界の權威

日本の子供

定價壹冊廿五錢送料五厘
半年分送料共壹圓五拾錢
壹年分送料共貳圓九拾錢

- ▽帝國劇場付畫家執筆
- ▽上品でうつくしい繪
- ▽面白くて爲になる話
- ▽每號新工夫の大附録
- ▽最良の幼年向繪雜誌

ナカヨシ

定價壹冊拾五錢送料五厘
半年分六冊送料共九拾錢
壹年分送料共壹圓七拾錢

麹町九段下

キンノツノ社發行

振替東京零〇五七貳